
~ Samon Hearts ~

ソフィア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

＼Samon Hearts＼

【Nコード】

N6210U

【作者名】

ゾフィア

【あらすじ】

”代表者”？ ”救世主”？ ”勇者”？ …嘘だろ？ 夜闇に紛れて”仕事”をこなす日々を送る”便利屋”の俺は、ある日突如として聞こえた少女の声と共に幻想世界へと召喚された…。右も左もわからない、今までの常識すら通じない世界で、俺は今日も”便利屋”としての”仕事”の日々を過ごしていく…。

序章 「死に抗った者達の物語」

…おや、またお会いしましたね。初めまして、と言った方がよろしいでしょうか。

それとも、ここに案内されてきましたか？

はたまた、私とは初対面でしたでしょうか？ …まあいいでしょう。

…さて、今回私がお話致しますのは、まだ彼の地が”幻想”とされていた頃のお話。

彼の地より呼び出され、数多の人々の期待を背負って現れたのは”異界の使者”でした。

ですが…どうやら彼は何事においても様々な意味で各々の想像を遙かに超えた存在のようです。

これは、どんな過酷な運命の最中にあっても、決して”死”に屈する事無く、抗い続けた者達の物語。

どうぞ、お楽しみくださいませ。

…それでは、参りましょうか。

…
…
…。

”異世界”。それは人が誰しも一度は夢見る世界だろう。

科学が発達した現代世界とは違い、剣と魔法が発達し、空を竜が飛ぶ。

そんな、ゲームだかマンガだかの中でしか見られないような世界を、誰もが一度は夢見るはずだ。

俺は…その辺はよく覚えていない。

ただ、そういつた”夢物語”は大人になっていく内に自然と消えていくものだ。

世の中の厳しさ、現実の空虚さを知り、自身が抱いた幻想を自然と捨て去っていく。

大人になるってのはそういうことだと思ってる。

ガキの頃どうだったかは覚えちゃいないが、少なくとも俺はそうやって大人になっていったクチだ。

科学が発達し、ありとあらゆる事象が解明できてしまうこの世の中、ある意味それもまた”魔法”の一種といえるのかもしれない。

あるいは…そんな”万物の事象すら解明できてしまう科学”なら、いつか遠い未来に”そういう世界”へと人々を送ることができるのかもしれない。

…まあ、そんなことを話しても仕方が無い。仮に科学の発展でそんなことができてしまっても、俺はその頃には死んじまってるだろうしな。

大体、そんな理屈ばかりでわけのわからないことを俺がいくら考えようが、世界ってのはいつも一定のペースで廻り続けてるだけだ。

…じゃあ何でこんなこと考えてるのかって？

そりゃあお前…”こんな状況”に陥れば誰だって一度は考えるはずさ。

「…」

俺は周囲に視線を送る。

周囲には俺を”奇異”とか、”疑心”とか、”好奇心”の瞳で見てる人、人、人。

そのどれもが、俺の知る限りでは”コスプレ”と称されてもおかしくないような服を着ている。

「……」
背後には”巨大な城”。

「……」
足元には、巨大な石畳の祭壇のようなもの、そしてそこに描かれている”魔方陣らしきもの”。

「……」
「……よくぞいらっしやいました。”代表者様”」

言葉を失っている俺に一步步み出る少女。

服装は当然だが、その長い髪から覗く両耳は…明らかな程”鋭く尖っている”。

「……」

……。

……。

……。

……どこだよ!??

序章 「死に抗った者達の物語」 (後書き)

ここから話が始まります。

ジャンル的には”異世界召喚モノ”でしょうか。

少しずつ更新していきたいと思います。

第1話 「幻想世界からの誘い」(前書き)

人々が寝静まる深夜。

そこが俺の”仕事場”だった。

なんてことのない日常に身を投じていた俺に、謎の”声”と、何かの”予兆”が訪れる。

第1話 「幻想世界からの誘い」

悪夢はいつもこんな光景から始まる。

燃え盛る炎に、焦げた匂い。

どこを見ても、瞳に写るのは赤、赤、赤…。

見上げれば、真っ黒な夜空と、大きな十字架。

そして、下に視線を落とせば、そこには

「ハッ…ハッ…ハッ…」

深夜の静まり返った路地裏を、1人の男が必死になって駆けていた。時々躓き、転んでもすぐに立ち上がって駆ける。

どこまでも無様で、どこまでも必死な走り。

男は決して貧しい身分の人間ではない。むしろ上等なスーツを着ている辺り、その辺の人間よりはよっぽど満足な暮らしをしている部類の人間だ。

では、なぜそんな人間が、こんな深夜に、路地裏を、無様にも駆けて抜けているのか。

…無理も無いだろう。なぜなら

ガシャァン！！

「アガツ！？」

再び躓き、その場に倒れ伏す。

どうやらもう立ち上がる力も残っていないのか、男はよろよろと壁にもたれ掛かると、荒い呼吸を繰り返し始めた。

「ハア…ハア…ハア…。…こ…ここま、で…くれ…ば…だ、大丈夫、夫…か…」

男は荒い息を吐きながらも、そんな事を呟いた。

そう、男は”追われている”のである。

捕まれば殺される。” そういう類の人間”に、だ。

「と、とにかく…早くこの街を出　　」

男がよろよろと立ち上がり、また駆け出そうとしたときだった。

「そいつは困るなあ」

「！！！？？」

月明かりの届かない、漆黒の闇が支配する路地裏に、違う男の声が響き渡った。

男はその声にビクリ、と反応すると、恐怖に歪んだ表情ながらもゆっくりと振り向いた…。

「アンタを殺^やらねえと、俺が殺されるかもしれないだよ」

僅かに差し込んだ月明かりは、黒いコートに黒い帽子、そして真っ赤に染まった小さな十字架を首に掛けた若い男の姿を映し出した…

「アンタを殺らねえと、俺が殺されるかもしれないんだよ」

”俺”はゆっくりと目の前の男に近づいていく。

「や…やめろ…来るな！！」

目の前の男は這いずりながらも逃げようとする。

「無様だな…お前。そこまでして死にたくないならさあ…」

俺は足に着けている短剣を抜き取り…

ドスッ！

「アガアアアアアアア…」

逃げる男の足目掛けて投げつけた。

短剣は男の太股に突き刺さり、男は痛みにもがく。

「お前が悪いんだぜ？　事情は知らねえが、ヤバい連中に目エ付けられるような事すつから…」

俺はこの男がなんで殺されなければならないのかを知らない。

必要な聞くこともあっただろうが、ただ”殺せ”と言われたから

殺すだけだ。

「お…お前、”雇われ”なんだろ！？ 頼むっ！ 助けてくれ！！
金ならあいつらの倍払うから…！！」

男はそこまでして生き永らえたいのか、俺に取引を持ちかけようとする。

俺はそんな男にため息を1つ吐くと、肩を竦めて

「あのなあ…。俺は確かに”雇われ”だけどな、雇われる相手は選ぶぜ？」

俺は反対側の足に着けていた短剣を引き抜く。

「今ここでテメーに雇われたところで、お前の都合のいい駒にされて飼育殺されんのがオチだろーが」

俺は何の躊躇いも無く男の心臓に短剣を突き刺した。

「カツ…！ ヒッ…！！」

男はその胸から鮮血を噴出すと、掠れた息を2、3吐き出して息絶えた。

「よ…い…しよつと」

俺は男の死体から短剣を引き抜く。

血を拭い去り、再び足に着ける。

「お仕事完了…と」

俺はポケットから携帯電話を取り出すと、今回の依頼主クライアントに連絡した。「俺だ。目標は間違いなく始末したぜ。何なら首を持って行ってやるるか？」

俺は受話器の向こうの人物に報告する。

『…その必要はない。既にこちらでも確認した』

「ああ、あのちょこまかつて来てる奴ら、やっぱりアンタの差し金か」

俺はすぐ近くのビルの屋上を見上げる。

人影が何人か見えた。もう隠れる気も無いらしい。

『流石だな。こちらの監視に気付いていたとは』

「いやいや、俺もこれで飯を食ってるからねえ」
俺はカラカラと笑って言う。

『…ご苦労だった。報酬は既に送ってある』
「ハイハイ、毎度どーも。またよろしく頼むぜ」
そんな会話を2、3交わして、電話を切った。
屋上の人影は、いつの間にやら消えていた。

俺は簡単に言う”便利屋”だ。

金さえ払えばなんでもやる。…もちろん最初からこんなヤバい仕事
ばかりだったわけじゃない。

最初こそもつと良心的な依頼も数多く来ていたが、こういつたヤバ
い仕事もこなしているうちに噂は広がり、次第に良心的な依頼が来
なくなっていた。

今じゃこんなヤバい仕事専門みたいになっている。…別に専門とい
うわけじゃないが。

まあ俺としてはこっちの方が実入りが良いし、別段困ることはない
のだが。

「ただいま〜と…」

誰もいない家兼店に帰ってくる。

机の上にはアタッシュケースが置いてあった。

俺はそれを開く。中には多額の札束がギッシリ。

「うん、確かに」

金額を確認すると、俺はそれを床板の下にある隠し金庫に放り込ん
でいった。

一度に全額盗まれるわけにもいかないの、一部は宝石に変えたり、
別の金庫に隠したりしている。

「えっと、今月はこれで終わりだっけか…？」

ひとしきり作業が終わると、俺は椅子に腰掛けて手帳を見る。

今のところ仕事の予定はないようだ。

「久しぶりの休日だ〜…」

明日は久しぶりにバーにでも顔を出してみようか…。
そんなことを考えながら、俺は床に就くのだった…。

バーからの帰り道、人気の無い寂れたスラム街を歩いていた時のことだった。

「んあ？」

静まり返った夜道に感じた殺気。

俺はそれを反射的にかわす、と…。

ビュオ！

「うおつと!?!」

さっきまで俺がいた位置に短剣の切っ先。

俺が距離をとると、それを取り囲むように数人の男が現れた。

「オイオイ、俺は男に好かれる趣味はないんだけどな？」

”ヤバい仕事”を引き受けるようになって変わったことが1つ。

それは、こうやって頻繁に俺も命を狙われるようになったことだ。

まあ大方：昨日始末した男のバツクの組織の差し金なんだろうが…。

（俺のことよく知ってる相手なら、こんなバカな真似はしねえよな

あ…）

俺は割りと裏からの評判が良い。…別に喜んでいいことでもないが、最初こそ毎日のように命を狙われ、何百人とそういう奴を相手にしてきたのだ。

そいつらはどうなったのかって？ …俺が生きてるんだから言うまでもないよな？

まあ、そんなわけだから、俺のことをよく知ってる奴らなら”刺客を送るだけ戦力の無駄”と考えるのである。

こんな風に襲ってくるのは、俺のことを知らないのか、あるいはよほど血迷ってるのか…。

「まあ、何にせよ…」

男たちはそれぞれの獲物を取り出す。

「タダじゃ帰してくれそうにねえな」

俺はゆっくりと身構えた…。

そんな俺に対し、男たちは一度距離をとってそれぞれの”獲物”を構える。

(ナイフ2…鎖鎌1…棒1…)

俺は構えたまま、即座に男たちの装備を確認する。

(歩道に消火栓…壊れかけた看板…)

一通り装備を見終えたら、次は周りの状況を確認する。

そんなことをやっているうちに

「…ッ！」

ナイフの男が襲い掛かってきた。

「お…つと」

俺はそれを難なくかわす。

背後から棒。

「ッ…！」

身体を捻ってそれを避けると、俺は横から男の棒を掴んだ。

「!?!」

獲物を掴まれて若干動揺した男の顔面に肘を入れる。

「ガフッ!!」

男は痛みに棒を放してしまふ。

目の前にもう1人のナイフの男。

「あつぶねえなあ!!」

ドガア!!

俺は男から奪い取った棒でナイフの男の顔面を横から殴りつけた。

「お前も、だ！」

そのままの勢いで身体を捻り、さっきまで棒を持っていた男の顔面にも横から打撃を加える。

ド…グ…

スイングの遠心力を乗せた重い一撃に、男は倒れて動かなくなった。

「まず1人…と!?!」

棒を持つている方の腕を鎖鎌の鎖で縛られる。

と、同時に左右からナイフの男。

俺はなんとか鎖で体制を崩されないように力を入れると、空いている方の手で太股から短剣を抜き、片方の男の”腕”に投げつけた。

ザク…!

男は突然訪れた腕の痛みを持っていたナイフを落とすそうになる。

俺はそれを蹴り上げ、そのまま後ろに倒れこんだ。

ドスウ!

俺が突然倒れこんだことに対応できなかったのか、もう片方の男はそのままの勢いでもう1人を刺してしまう。

「あーあ。俺はしらねー、ぞっと!!」

俺は見方を刺し殺してしまった哀れな男を足払いで転ばせ

「離れるよ!!」

持っている棒を持ち替え、鎖鎌の男の近くにあった消火栓へと思いつきり投げつける。

ガツ! ブシャアアアアアア!

消火栓は棒の衝撃で凹み、水が勢いよく飛び出してきた。

突然水を浴びることとなり、俺の縛る鎖が緩くなる。

「今だ…!!」

俺は拘束されている腕を思いつきり引つ張り、男はそれに引きずられてこちらへ寄って来る。

その男の顔面に拳を入れ、鎖鎌を持っている腕に肘を入れる。

男は鎖鎌を手放し、顔面の衝撃に一步引く。

「3人目、だ!!」

俺はさつき蹴り上げたナイフをキャッチすると、そのまま男の喉下に突き立てた。

「力…」

真っ赤な鮮血を噴出して息絶える男。

「お前でラストか…」

俺は即座に振り返ると、さっき奪い取った鎖鎌で最後の男を拘束した。

そしてもう一本の短剣を抜き取り、頭上の看板の留め金目掛けて投げつける。

「…バイバイ」

錆付いて劣化した留め金はそれだけで壊れ、それを支えていた看板は落下。男はその下敷きになった。

「おおう、スプラッタ…」

気分悪くなるから見ないでおこう。

「さて…死体はどうしたのか…」

もうすぐ夜が明ける。時間的な意味でも死体の数的な意味でも流石に後始末は完璧にはできなさそうだ。

俺を襲ったこいつらがどこの差し金なのかは後々調べるとして…どうしたもののか。

「とりあえず目立たない位置に移動させて　　ッ!？」

俺がそう思って一歩踏み出そうとした時だった。

……………え……………た…よ…

不意に声のようなものが響く。

耳から聞いているというよりは…頭の中に直接響いてくるような…。

「幻…聴…か？」

……………が…と……………か…の……………よ…

「ぐ…っ!？」

幻聴というにははっきりと聞こえてくる。

これは…女の声、か…？

…の…を…へ…せ…

「く…そ…っ！」

なんなんだよ、一体!?

…ん…わ…と…

やがて、その声は薄らぎ、そして何事も無かったかのように消えてしまっていた。

「何だっつてんだよ…まったく…」

疲れてるんだろうか…?

「とにかく、後始末を…」

俺は早々に痕跡を消し去ると、足早に帰路に就いたのだった…。

第1話 「幻想世界からの誘い」 (後書き)

戦闘シーンって難しいなあ…。
読みにくかったらスミマセン。
感想お待ちしております。

第2話 「彼の者よ、来たれ」(前書き)

代わり映えの無い日々を生きる俺。

そんな中聞こえてくる”女の声”。

その声はつきりと聞き取れたとき、俺はこことは違つて何かへと
呼び出されたのだった…。

第2話 「彼の者よ、来たれ」

Another Side

月明かりの満ちる夜闇。

そこには、月明かりとはまた違った光がぼんやりと灯っていた。その光に映し出されるは”巨大な祭壇”。

その祭壇には二つの人影が映し出されていた。

「いよいよ明日、ですか…」

美しい女性の声。

「そう、ですね…」

それに答えるは、まだ幼さの残る少女の声。

「緊張しているのですか？」

「いえ、大丈夫です。ついに私にも、このような機会が与えられたのですから」

労わる女性に、少女は力強く答えた。

「そうですか…。ならば私はわたくし貴女を信じるだけです」

女性は優しげに微笑むと、少女の頭をゆっくりと撫でた。

「…今回の”召喚の儀”。必ず成功させてみせます」

少女ははつきりと、強い意志の宿った瞳でそう告げた

Another Side Out

不思議な幻聴があった夜から一夜明け、俺はいつも通り”便利屋”としての日常に身を投じていた。

カツン！

「うおっと！…あぶねえ…」

足を踏み外しそうになり、冷や汗が出る。

”高所”特有の強い風が俺を襲う。ちよつとでも足を踏み外せば俺は落下。

一応落ちたときのための供えはしているものの、”仕事”はほぼ間違いない失敗するだろうし、最悪死ぬことになるだろう。

俺は今、街に高くそびえる90階建ての高級ホテル…の壁の出っ張りに張り付いていた。

もちろん1階とかそんな子供だましな場所じゃない。

現在86階部分。もちろんものすごく高い。ていうか下見れない。

別に高所恐怖症とかではないが、多分下を見てこの高さを間近で体感すればそうなるであろう。

だから見ない。ていうかも下見なくても怖い。

”便利屋家業”とは、常に死と隣り合わせなのである。

「…つたく。わざわざこんなところに泊まらなくても、よ！」

今回の依頼は前回と同じく”要人暗殺”である。

ターゲット

目標はこのホテルに宿泊。最上階のスイートルームにいる。

それだけならいいのだが、なんとも強そうなスーツのお兄ちゃん達がエントランスから見張っている為に俺は”壁を登る”しか選択肢が無くなってしまったのだった。

俺は短剣の柄にワイヤーを取り付け、上の壁の出っ張りに投げつけて突き刺す。

「…よし！」

軽く引つ張って抜けないことを確認すると、俺はワイヤーを引つ張りながら壁に足を掛けて登り始めた。

「これで…87…！」

90階だからあと3回これをやれば到着だ。

降りるときはワイヤーで一気に降りればいいからずっと楽である。
「…よ、い、しょっと！」
俺はようやく終わりの見えてきたこの作業にため息をひとつ吐くと、再び短剣を投げつけるのだった…。

Another Side

この男にとって”高所”というものは最も気分が高揚する場所であつた。

高級ホテルの最上階、そこに用意されたスイートルーム。その”選ばれし者”、”成功者”のみが立ち入ることを許される場所から下々の人間たちを見下ろす。

上等なワインを飲むことよりも、とびきりいい女を手に入れることよりも、自身の富が増えていくことよりも…。

これこそが彼の至福の瞬間であつた。

最初こそ自身もあの場所にいた。しかし、少しずつ昇進し、上司の愚痴にも耐え、やがてこの街の”裏”にも触れてようやくこの場所まで上り詰めた。

自分は”成功者”として成り上がることができたのだ。そういつた達成感や満足感が、彼を満たしていく。

ひとしきり至福の時間を堪能した後、シャワールームに向かう。明日も早朝から予定が詰まっているのだ。

一企業のトップまでは上り詰めた。だが、彼の野心は留まる事を知らない。

「次は…この街を…！」

そう、次はこの街のトップへと。そしてここ以上の高みから下界の

人間たちを見下ろしてやるのだ。

「クク…これだから”高所”というものはたまらない…！」

「そうか？ あんまいい事だらけとも思えないけどな？」

「！？」

突然の聞きなれない声。

おかしい、この部屋には一切誰も入れるなと外の見張りには言っている。

「まさか…侵入者だと…！？」

男はすぐに近くに置いてある銃を片手に慎重にシャワールームから出た。

気配を探りながら周囲を警戒する。

「高いところは登るのが大変だ。それに失敗したら落ちたときのダメージもデカイ。下手すりゃ死んじゃまう」

「ッ！！」

再び声。その方向へと銃を構えると…。

「だから高いところへ行くのは勇気が必要だ。けど誰だって痛い思いはしたくないだろう？」

Another Side Out

ご丁寧に周囲を警戒していたみたのだが、俺は悠々とスイートルームのふかふかのソファに座ってその座り心地を堪能していた。

ううむ…俺には高級感がありすぎてなんだか落ち着かないな…。

「…ていうかな、高いところはやっぱり落ちると思うと怖いわ。登ってくるとき…苦労だったもん」

やっと俺に気づいて銃口をこちらに向けた男に、俺は余裕を持って

喋る。

「…どうやってここに入った？ 見張りはどうした!？」

怒鳴る男に、俺はゆっくりと立ち上がり、背後のガラスをコンコンとノックした。

「だから、登って来たんだってば。ほら」

俺は綺麗に丸く切り抜かれたガラス戸を示す。

屋上はスイートルームのプールになっているから、登ってしまえばガラス戸を切り抜いての侵入は容易だった。

「…くっ！ 誰か」

「呼んでも無駄だと思っぜ？ みんな眠ってるからな」

外の見張りを呼ぼうとした男に、俺は肩をすくめて言う。

まさか奴らも”部屋の中”から侵入者が現れるとは思ってなかったのだろう。あっけなく始末することができた。

「…何が望みだ？ 金か？ それとも地位か？」

観念した男はそんなことを言い始める。

やれやれ…なまじ権力や金がある奴はみんなそうやって逃げようとするなあ…。

「地位なんかに興味はねえよ。金も十分な額を約束されてる。…必要なのは、アンタの命だけだ」

俺の放つ殺気に気圧される男。

「チッ…。…死ね!!」

「遅え!!」

打つ手が無いと判断した男は、銃の引き金を引こうとする。

…が、俺の投げた短剣は男の腕に刺さり、男は銃を取りこぼしてしまふ。

すかさず男に接近した俺はもう一本の短剣を抜き取り…

「…あばよ」

ザ、ク…

「…かっ…」

寸分変わらず、男の心臓を刺し貫いた。

男は静かな断末魔と共に、その場に崩れ落ちた…。

Another Side

朝日も未だ昇らぬ早朝。

昨夜月明かりに照らされていた祭壇も薄明かりに照らされてその輪郭がはつきりとしていた。

本来なら多くの人間が未だ寝静まる早朝…にも関わらずその日、その祭壇には多くの人が集まり、いつもは静寂に包まれているこの場所をガヤガヤと賑やかにしていた。

祭壇の上、そこに佇むは2人の女性。

それは昨夜と同じ女性と少女の2人であった。

女性はやや緊張した面持ちで”背後の城のテラス”から見守る女性に合図を送る。

「皆の者、静粛に！！」

その合図を確認した彼女は、ざわつく人々に向かって力強くそう告げた。

その瞬間、ざわついていた人々は口を閉ざし、周囲が沈黙に包まれる。

それを確認した彼女は一度咳払いをすると、再度力強く告げた。

「ではこれより！！”異界”からの”代表者召喚の儀”を行う！！」その言葉に、周囲も次第に緊張の雰囲気漂い始める。

祭壇の上にはいた女性は少女の肩を優しく叩き、それを確認した少女はちらり、と一度だけ女性の顔を一瞥した後、ゆっくりと祭壇の中央へと歩いて行く…。

祭壇には”巨大な模様”が描かれており、その中央　祭壇の中

央へとたどり着いた少女は、その手に携えた杖を掲げ、ゆっくりと瞳を閉じた…

Another Side Out

”それ”が訪れたのは、仕事を終えて帰路を急いでいた時だった。

「さて…さつさと帰って　　!？」

…わ…えに……よ…

突然頭の中に響いてくる女の声。

「こ…れは…っ!？」

この感覚には覚えがある。この前の幻聴だ…!

「ぐ…っ…!!！」

だが、前よりもはつきりと声が聞こえる。

それに…なんだか視界がぼやけて…!？」

「く…そ…!?!? 何なんだよ…!!！」

たまらず頭を抱え、その場に膝をつく。

しかし、そんなことでは幻聴が止む気配はなかった…

Another Side

「…我が声に答えよ…」

少女が言葉を紡ぐ。と同時に少女の身体を光が包み、足元
祭壇に描かれた模様も光り輝き、浮かび上がる。その光景に、周囲の人間が皆息を飲む。

Another Side Out

…え…ばれ…も…よ…

「く…そ…」

次第に視界がはっきりとしなくなっていく、と同時に幻聴がはっきりと聞き取れるようになってきた

…我が…びかけ…えよ…

「く…。意識…が…!!」

…汝の力、…れ…示し…え…

「っ…!!」

…汝が力、その手に…え…が元へ…たれ…

「…!!」

意識が完全に闇へと落ちる寸前。その声は、はっきりと聞き取れるものとなった。

… ” 大いなる力 ” に選ばれし彼の者よ、我が元に来たれ…！

…そしてそれが、意識を失う寸前に聞き取った最後の言葉だった…。

第2話 「彼の者よ、来たれ」(後書き)

ついに幻想世界へと召喚された主人公。
ここから物語が動き出していきます。

初挑戦のファンタジー物、お楽しみに。

第3話 「異界」の「代表者」 (前書き)

意識のはっきりとしないまどろみの中。

目が覚めると、そこには夢のような世界が広がっていた。

得体の知れない世界で俺は、得体の知れない連中と相対する…。

第3話 「異界」の「代表者」

不思議な感覚だった。

身体を覆うのは”不自然な浮遊感”。

上下左右の感覚が曖昧で、無重力 宇宙とか水中にいるかのよう
な感覚だった。

だが、別に呼吸はできているらしく、特に息苦しさを感じるような
ことは無い。

(これは…夢?)

夢にしては感覚が曖昧だ。だが、今現在の俺の意識もまたまどろみ
の中のように不安定で、起きているとも、眠っているともわからな
い状態だった。

感覚を研ぎ澄ませようとしても、不思議と意識は不安定のまま
で、いつたい今自分がどこにいるのか、意識を失ってからどの位の時間
が経ったのかすらわからなかった。

意識を…失う?

(そうだ…! 俺は確かあの時意識を失って…!)

そんな事を考えた時だった。

『…”大いなる力”に選ばれし彼の者よ、我が元に来たれ…!』

(っ!?!? また…!?!?)

あの時間こえた幻聴と同じ”女の声”。

今度ははっきりと、確かに聞き取れた。

そして、その言葉を聞き取った瞬間

ドン!

「痛っつ!?!?」

…背中に走った衝撃に、俺の意識はゆっくりと覚醒していっ
た…。

「ぐ……」

突如として背中に走った衝撃。…その前に一瞬感じた落下の感覚から想像するに、どうやらちよつとした高さから落ちたらしい。

まあ、あくまで”ちよつとした”高さなので背中に鈍い衝撃が走った程度で骨とかは大丈夫そうだ。

(んっ…。外…か?)

ゆっくりと瞳を開く…と、最初に目に映ったのは薄明かりに照らされる青空だった。

薄明かり…おそらく時刻はもう夜明け頃なのだろう。

俺が意識を失ったのは真夜中だったから、数時間が経過しているということだ。

(ん…? なんだか様子がおかしい…?)

次第にはつきりとしてくる感覚。

それと同時に、俺は周囲の”異変”に気が付いた。まず視覚。

俺は瞳だけを動かして周囲の様子を観察する…と、俺の瞳には”何も映らなかつた”。

と言つても、別に失明したとかではない。周囲には青空が広がるばかりで、”何も無かつた”のだ。

俺が意識を失つたのは確か人気の無い路地裏だったはず。ならば視線を移せば周囲には高層ビルといった建築物が見えるはず…のだが、それが無い。

次に嗅覚。

俺の鼻腔をくすぐるのは、わずかな”草の匂い”。

さつきも言ったが俺は路地裏で意識を失つたのだ。雑草は生えているかもしれないが、ほとんどがコンクリートの地面ならばこんな匂いはしないだろう。

その次は聴覚。

さきほどから周囲にはちよつとしたざわめきのようなものが起こっ

ている。

ざわめき…というよりは、集団でヒソヒソ話をしている…といった感じか？

聞く限り360度全方向が人ごみで溢れ返ってる。

もし俺が未だ路地裏にいるのなら、こんな集団は入りきらないだろうし、というより人気の無い路地裏にはこんなには人は集まらない。

そして最後に…”気配”。

さっきからずっと聞こえているヒソヒソ話を聞く限り、俺の周囲にはかなりの人数がいる。が、それとは別に俺のすぐ近く。少し頭を動かせばその姿が見えるであろう場所に”2人分の気配”。

「…」

何もかもが異常だ。

そして、ここまで異常な状況に陥った理由として最も可能性が高いのは1つ。

ならば、それに対する俺の対応もまた、1つしかない。

「…」

俺が冷静に周囲の状況を伺っていると…

「無事に到着なされたようで何よりです。”代表者様”」

「っ！」

「え きゃっ!?!」

突然、俺のすぐ近くの”気配”の1つから声を掛けられた と

同時に、俺は腰を後ろに持ち上げて後転。その勢いで立ち上がり、その”気配”から距離をとった。

そう、ここまで周囲の状況が変化している理由…その理由として最も可能性が高いのは、”俺が意識を失っている間にどこかに運ばれた”というものだ。

あるいは…その”意識を失った”という事実も、今ここにいる連中の仕業だったのかもしれない。

「…!?!」

立ち上がったことで、周囲の様子がはっきりとわかるようになった

…が、そこには、夢じゃないかと疑いたくなるような光景が広がっていた。

「…」
俺は周囲に視線を送る。

周囲には俺を”奇異”とか、”疑心”とか、”好奇心”の瞳で見てる人、人、人。

そのどれもが、俺の知る限りでは”コスプレ”と称されてもおかしくないような服を着ている。

「…」
背後には”巨大な城”。

「…」
足元には、巨大な石畳の祭壇のようなもの、そしてそこに描かれている”魔方陣らしきもの”。

「…」
「…よくぞいらっしやいました。”代表者様”」

言葉を失っている俺に一步步み出る少女。
服装も当然だが、その長い髪から覗く両耳は…明らかな程”鋭く尖っている”。

「…」

……。

……。

…。

ここどこだよ!?

え、何? ドッキリ? コイツら俺をハメようとしてんの!?

わけがわからん。脳が必死に事態を把握しようとしているが、まったく処理が追いつかない。

「あ、あの…どうされたのですか？」

目の前の耳の尖った少女が恐る恐る俺に問いかける。

警戒されているのがわかっていいるのか、距離はそのままだ。

(…ん?)

目の前の少女の言葉に、俺は何か引つかかりを覚えた。

この声…俺は…聞き覚えがある…?

俺は周囲への警戒はそのままに、記憶の中を探っていく。

俺にはこんな”耳の尖った少女”の知り合いはいない。じゃあいつ
たいどこで　！？

『…”大いなる力”に選ばれし彼の者よ、我が元に来たれ…!』

(そつだ…! 幻聴で聞こえた女の声…!)

聞き覚えがあるはずだ、俺が意識を失うきつかけとなった”幻聴”
の声と、目の前の少女の声はまったく同じだった。

最後にはっきりと聞き取れたときのものは完全に一致している。
と、いうことは…!

「お前か！ お前の仕業か!？」

「え　　きゃ!?!？」

俺は一瞬で少女に詰め寄り、両肩を掴んで問いただす。
ざわっ…

俺が少女に詰め寄ると同時に、恐る恐る様子を伺っていた周囲の連
中のざわめきが大きくなる。

「レフィリナ様!?!？」

最も祭壇に近かった兵士…?の集団の内の1人が慌てて祭壇を駆け
上ろうとする。

「大丈夫です！ …この方は今、混乱しているだけだと思いますか
ら…!」

俺に両肩を掴まれている少女は若干俺に怯えながらも、はっきりと
した口調で兵士を制した。

「お前、レフィリナって名前なのか」

俺の問いかけに、彼女は小さく頷くと

「はい。神殿の巫女、レフィリナ・システィ・エストールと申します」

そう言い、俺に肩を掴まれながらも小さく頭を下げた。

「突然の状況に混乱されているとは思いますが、どうか落ち着いて私の話を聞いてはもらえないでしょうか？」

少女はゆっくり、俺を落ち着けようとしながら話を続ける。

そんな彼女に、俺も少し冷静になり

「…わかった。けど妙な真似はするんじゃないぞ？」

そう言つて、彼女　レフィリナの両肩から手を離れた。

と、同時に、緊張していた周囲の雰囲気がほんの少しだけ緩んだ。

話を聞く意思を見せてくれた俺に彼女は少しだけ笑みを浮かべ、改めて頭を下げる。

「ありがとうございます。えっと　よろしければお名前を伺つても？」

「…シンだ」

俺は短く答える。

ちなみに本名ではなく仕事上の通り名のようなものである。

…と言つても、大して不便でもないので俺はこれを”本名”として使っているが…。

「それでは、改めて　よろしくお願い致します。シンさん」

そう言つて、彼女は再び頭を下げる。

「前置きはいいよ、さっさと話してくれるか」

冷静にはなった。が、はつきり言つてコイツ含め周囲の連中は誰一人として信用しじゃない。

俺は周囲の警戒を解くことは無かった。現に今でも彼女の肩を解放した後は一定の距離を保っている。

もし彼女の話が作り話丸出しだったら実力行使も辞さないし、それ以前に周囲の連中が少しでも妙な動きをするようなら容赦はしない。

知らない土地で、この人数。もし揉め事になったらかなり不利だが、状況が状況だけに贅沢は言ってられなかった。

未だ警戒されていることを気にしているのか彼女は少し寂しそうな表情を浮かべたが、すぐに気を取り直して

「それでは。お話いたします…」

そう告げると、ゆっくりと語り始めたのだった…

そこで聞いた話は、なんともファンタジー全開なものだった。

この世界は俺がいた世界とは別の世界で、俺の住んでいた世界はこっちでは”異界”と呼ばれていること。

この世界には”神界”。”魔界”。そして今現在俺たちのいる”人界”の3つの世界が存在していること。

俺は”異界”から彼女の力で呼び出されたこと。

e t c …

正直理解なんてできようはずも無い。

確かに周囲の風景は何ともファンタジーだが、こいつら全員がゲルになって俺をハメようとしているのかもしれない。

あるいは、その手のわけのわからん宗教か…。

(宗教、か…)

「…大まかにはわかった。だが、その話が本当だという保障がどこにある？ いや、それ以前に…」

俺は自身を指しながら問う。

「仮に…もし仮に、その話が全部本当だったとして…なぜ俺をそんな世界に呼んだ？」

そう、別にここがファンタジーな異世界だとかそういう話は抜きにしても、何で俺がそんなわけのわからない事に巻き込まれたのだろう。

言っておくが俺は何の変哲も無い”ただの便利屋”だ。

俺の疑問に、彼女は真剣な面持ちで告げる。

「あなたには、その内に眠る”力”があるのです。故に”代表者”として選ばれ、こうしてこの世界に召喚されました」

「”力”…?」

「…どうか我々に力をお貸しください。”異界”の”代表者”様」
彼女は一步こちらに踏み出し、凜とした口調でそう言った。

第3話 「異界」の「代表者」 (後書き)

さりげなく3話目にしてようやく主人公の名前判明。
意外に長くかかってしまいました。

この辺りからファンタジーっぽくしていく予定です。

第4話 「前代未聞の救世主」(前書き)

それは、”異世界”からの俺に対する呼びかけだった。

俺の知らない世界。俺の知らない人々。

その人々からの呼びかけに、俺はひとつの答えを下したのだった…。

第4話 「前代未聞の救世主」

「…どうか我々に力をお貸しください。」異界”の”代表者”様
彼女は一步こちらに踏み出し、凜とした口調でそう言った。

”代表者”…。確かさつきも俺をそう呼んでいたな。

代表者つてのは…用はアレか？ こういう小説とか漫画で言うところの”勇者様”とか、そういうポジションなのか？

…つてことはアレか、”俺”がそういうポジションだったのか？

「…」

…。

「…アホらし」

俺の口からは、そんな呟きが漏れていた。

残念ながら俺はしがらない便利屋だ。こういう展開に胸を躍らせる年齢はとづくに過ぎて、いい加減現実を見なきゃいけない年齢である。そうでなくとも俺は職業柄、とことん現実主義な考え方になっちまってるつてのに…。

「悪いが、俺はアンタ等が思ってるほどの人間じゃねえぞ？」

だが、目の前の少女は俺のそんな言葉を首を横に振って否定する。

「分かんねえ奴だな…。俺は」

「フフ。自身の”力”を過小評価するのは良くありませんよ？ 代表者様」

俺の言葉を遮って響く声。それは目の前の少女から発せられたものではない。

俺は声のしたほうに視線を向ける。そういえばもう1人いたんだっ
たな…。

視線の先には若い女性…と言っても、さつきまで話していた少女よりはずっと大人びている。年齢は恐らく俺と同じくらいなのだろう。

「アンタは？」

俺の問いに、彼女は会釈する。

「申し送れました。私は神殿わたぐしの導師。エンフェル・エストールと申します」

エンフェル：そう名乗った女は言葉を続ける。

「彼女　　レフィリナは未だ修行中とはいえ神殿の巫女。彼女の選定に選ばれた貴方には確かに”力”を感じます…。そう、”心器しんき”の担い手として相応しい力が　　」

”心器”：また新しい単語が出てきやがった。

怪訝そうな顔をする俺に、再びレフィリナが口を開く。

「今、この国は　　いえ、”この世界は”今、”影の異形”の脅威に晒されているのです」

”影の異形”：それはさっき聞いた”この世界の成り立ち”についての話にも登場した単語だ。

”神々の戦乱”によってぶつかり合うこととなった双神の力の成れの果て…だったか。

「かつて封印され、この世界から消滅した”影の異形”。それが近年復活の兆しを見せ、それと同時に世界中で再び”影の異形”が現れ始めたのです」

ふむ…こいつらの話を全て真実と仮定するのなら、その”双神”とやらですら苦戦した”影の異形”の存在はこの世界にとって相当な脅威となっているんだろうな。

「この世界には多数の種族が存在しています　　それは先ほどお話しした通りですが　　我が国では、その各種族から1人ずつ”心器”の担い手となる人物を選定し、その種族の”代表者”として”影の異形”と戦ってもらおう…という計画を実行に移しました」

「”1人ずつ”…ってことは、俺以外にもその”代表者”とやらがいるってのか？」

俺の問いに、少女は頷く。

「”代表者”として選ばれた皆様には、”心器”を用いて”影の異形”と戦ってもらい、この国に平和をもたらした者は”救世主”と

して後世までその名を遺すこととなりました」

「…」

おいおいおい…。

なんだか想像以上に面倒な事に巻き込まれたんじゃないか？ 俺。
俺が思わず頭を抱えていると、そんな俺の気持ちなんざ気付くこと
も無く

「貴方は”異界”の”代表者”として選ばれました。…突然のこと
で混乱されているとは思いますが。…ですが、どうかこの国のために、
”この世界”のために…、力をお貸しください…！」

少女は真剣な面持ちで、深く、深く頭を下げた。

と、同時に、エンフェルと名乗った隣の女性も頭を下げる。

「…」

目の前の少女も、その隣の女性も、真剣だ。

これまで話を聞いていたが、彼女が嘘を吐いている素振りには微塵も
感じられなかった。実際に彼女の言葉には嘘は含まれてないんだと
思ってもいい。

さつきから得体の知れないことだらけだ。この周囲の雰囲気を含め
ても俺が”異世界”とやらに迷い込んだという話はあながち嘘では
ないのかもしれない。

普段の俺なら一蹴してしまうような話。それがこんな風に自然と受
け入れられてしまうのは、目の前の少女が真剣で、必死に訴えかけ
てくるからなのだろう。

「…そうだな。ここが”異世界”だという話。信じてやってもいい」
気付けば、俺はそんな言葉を口にしていた。

「…！ そ、それじゃあ…」

俺の言葉を聞いて、レフィリナは嬉しそうな声色で顔を上げる。
が、

「だが協力する気はねえよ」

俺は、はっきりと拒否の返事を叩きつけていた。

「え」

俺の発言がよつぽど予想外だったのだろう。彼女はおるか、隣にいるエンフェルも、周囲で様子を伺っていた人々でさえ固まってしまうていた。

すっかり耳では聞いたが、脳の理解が追いついていない、そんな感じだった。

「ていうかお前等な、熱意とか気持ちは認めてやってもいいが…いきなり人を呼びつけといて”協力してください”なんて虫が良すぎると思わねえのか？」

未だ固まっている周囲の状況もお構いなしに俺は続ける。

「しかも内容は”影の異形”なんて化け物と戦えって？ 国が総力挙げて手こずるような相手と殺し合えってか。何で見ず知らずの他人のためにそこまで命張らなきゃいけねんだよ？ 俺はそんなお人好しじゃねえっつーの」

「な」

これには流石の2人も予想外だったのか、若干笑顔が引きつっている。

「拳句の果てに報酬は”救世主”の名声だけか？ 割に合うかアホんなモンより金とか宝石とかそういう”身になる”モン用意しろや」「も…もちろん。国を救った”救世主”様には相応のお礼を」

レフィリナは俺の言葉を聞いて、慌ててフォローを入れる。が…

「だからさあ…」割りに合わねえ”って言ってるの。ここが”異世界”なら、ここで有名になろうが俺が”元の世界”に帰っちゃえば意味ねえだろうが。ていうか、いくら俺でも命張ってそんな化け物と戦う気はねえよ」

俺は”便利屋”だ。だが、ヤバい仕事をしているだけに依頼主はよく吟味している。クライアント

そして何より、こつという仕事は”等価交換”が原則。

少なくとも、国が手こずる化け物に”こっち限定”の名声や大金じや割に合わなかった。

「そ…それじゃあ、貴方さえ良ければこの世界に永住していただいても…」

「ハア…ホント交渉のヘタクソな奴だなあ…」

必死に食い下がる少女に、俺は半ば呆れながら続ける。

「わかった。そこまで言うんならハッキリ言っつてやる」

俺は少女を力強く指差し

「お前等がどうなるうが俺の知ったことじゃない。興味も無い。そんなに協力して欲しけりや相応の”報酬”用意して出直して来い…もしくは他を当たれ…これで満足か？」

そう、ハッキリと告げた。

「な…なっ…！」

この一言で、少女の笑顔は完全に崩れた。

俯き、プルプルと震えている。

隣にいるエンフェルも俺の一言に絶句していた。

「お…おい。”あれ”が本当に代表者様なのか…？」

「レフィリナ様にあんな物言い…。いくらなんでも…」

「ど、どうする…？」

周囲の野次馬どもも流石にざわめいている。

「とにかく、俺をさっさと元の場所に帰せ。お前が呼んだんだからできるよな？」

だが、レフィリナは俺の言葉にも反応せず、ただ俯いて震えているだけだった。

「…チツ。もういい、勝手にさせてもらっぜ」

このままここにいても埒が明かない。そう判断した俺は、踵を返して祭壇から降りようとして

「…貴様！ 黙って聞いていればレフィリナ様に向かってなんと無

礼な口を…!」

「…あん?」

そこにいたのは、先ほど祭壇を駆け上がるうとしてきた兵士。

「レフィリナ様に免じて静観していたが…もう許せん…!」

どうやらレフィリナに対する俺の態度が気に入らなかつたようで、剣を抜き、俺をまつすぐに睨んで来る。

「レフィリナ様。申し訳ありません…どうか、この男を切り捨てることをお許しください…」

「…ハン。これだから主従関係の犬って奴は…」

ご丁寧なレフィリナに向かつて一礼する辺り、相当真面目な奴なんだろう。だが、俺はそういう人種はあまり好きではなかつた。

「なっ…貴様…!」

「殺す気で来るんならそれでもいいけどよ…」

俺の挑発に乗って憤慨する兵士に、俺は一呼吸置いて、低く告げる。

「…殺される覚悟”も、当然出来てるんだろうな…?」

「なっ…!?!?」

今まで異常に発せられる、冷たく、鋭い”殺気”。それに本能的な恐怖を感じたのか、兵士が一瞬うろたえる。

その”一瞬”を、俺は見逃さなかつた。

「隙だらけなんだよ…!」

ヒュン…!

ガイーン!

「あ…ぐう…!?!?」

俺がすかさず投げつけた短剣は剣を握る兵士の手に当たり、鎧で突き刺さりはしなかつたものの、その衝撃で兵士の持つ剣を弾き飛ばしていた。

「そら、よ…っ!」

ゴスッ…!

「ガフッ!?!?」

そこへすかさず俺は階段を駆け下り、途中で跳躍。高所からの落下

の勢いも乗せた膝蹴りを、兵士の顔面に叩き込んでいた。
ガッシャアアアアアン！！

その衝撃で兵士は階段を転げ落ち、そのまま意識を失って動かなくなつた。

「「「…」」」

あまりの突然の出来事に硬直し、再び沈黙する人々が、やがて人々が状況を理解すると

「キャアーーーーーッ!?」

「な、なんだよアイツ…!?!」

「こ…殺される…!?!」

一気に人々はパニックになり、周囲のざわめきは限界まで達した。
「く…くそっ!?!」

今ので俺を”敵”と見なしたのか、兵士どもは一斉に剣を抜いて俺と対峙する。

「んだよ…? お前等も邪魔するんだってんなら、容赦は」
俺が周囲の兵士を睨み付けようとして

「静まらんか!?!」

叫び声が響き、周囲のざわめきは一瞬で止んだ。
俺は声のした方向を見る。

その場所 目の前に佇む城。そのテラスからこちらを見下ろしている女性が微笑を浮かべつつ言った。

「我が城の兵士が無礼を働いたようで申し訳ない。どうか今一度落ち着いてはもらえんか? ”代表者”殿」

第4話 「前代未聞の救世主」(後書き)

ここで快く引き受ける…なんて王道は問答無用で叩き潰します。
異界からのSOSコールを一蹴したシン。

問答無用で帰ろうとする彼に、1人の女性が声を掛けました。

次回もお楽しみに！

第5話 「クライアントオーダー」 (前書き)

無理矢理にでも帰ろうとする俺を引き留める声。

その主から持ちかけられた”取引”。

そして、俺はこのわけのわからない戦いに巻き込まれることとなる
…。

第5話 「クライアントオーダー」

「我が城の兵士が無礼を働いたようで申し訳ない。どうか今一度落ち着いてはもらえんか？」 代表者”殿」

テラスからこちらを見下ろす彼女は、微笑を浮かべながらそう言った。

周囲の人間も、兵士たちも、そんな彼女を前にして緊張した雰囲気漂わせていた。

わざわざあんなところから見ていて、なおかつあの服装や振る舞い…。俺はその一瞬で、あの女こそがこの国においての”重要人物”なのだ と理解した。

「もう少し我々のことを知ってもらいたい。…少なくとも、このように我らが争う必要はないだろう？」

そう言つて、一瞬だけ俺の周囲を囲んでいる兵士たちに視線を移す。「…俺にどうしろと？」

俺の問いに、彼女は微笑を崩すことなく

「できれば私の話を聞いてもらいたい。もちろん説得…というものがあるが、私は単純に貴公に興味があるのだ」
そんなことを言った。

「姫様!？」

兵士たちがそんな彼女の言葉を聞いて動揺している。

…なるほど、やっぱり”姫”なんだな。

「できれば城まで来てほしい。待っているぞ」

彼女はそう言いながら俺の周りの兵士に目配せをする。

その”目配せ”の意味をすぐに理解して、俺は笑いながら言った。

「何が”来てほしい”だ。俺が断つたら無理矢理にでも連れてこさせる気なんだろ？」

俺の指摘に、彼女は一瞬驚いた顔を見せたが、すぐに軽く笑って

「そうだな。…できれば、そうならないようにあってほしいものだ」

それだけ言つと、テラスの奥へと姿を消した…。

「流石というか、なんとというか…」

わざわざ揉め事を起こす必要はない。そう判断した俺は、とりあえず彼女の提案を素直に受けることにした。

兵士に案内されて謁見の間へと向かう途中、俺はこの城の装飾や雰囲気まじりに感嘆していた。

流石に元の世界でも城の中にまで入ったことはない…というかそんなものは無いからなあ…。

「ここが謁見の間です」

兵士が立ち止まる。と、俺の目の前には大きな扉が現れた。

「…ホント、流石だわ…」

俺は小さく呟きながらも、扉を開けて奥へと歩みを進めていった…。

「来てくれたか、”代表者”殿」

謁見の間には、既にあの女が玉座に座って待っていた。

周囲にはなんとも上等な服を着た連中が数名いる。…恐らくは、外の連中と同じような理由で集まった野次馬連中だろう。

…玉座の陰に人の気配がするな。護衛か…？

「私の名はアリエルという。一応は”この国を治める立場の人間”…ということになるな」

改めて見てみると想像以上に若い。この若さで女性が王になったあたり、なにかワケアリなのかもしれない。

「…シンでいい。その呼ばれ方はあまり好きになれない」

今現在　少なくともあの少女の話聞いた時点では話に乗る気はなかった。

「ふむ…確かに突然異世界の住人である貴公を呼び出した事に関しては国を代表して謝ろう」

…俺の言わんとしている事を察している辺り、どうやら少しは話せる相手らしい。

いや、そうでなくては一国の姫は務まらない…か？

「だが、こちらとて事情があったのだ。そうでなくては、未だ”存在が不確定”な世界の住人を呼び出して頼る…などということはせん」

「さて、”存在が不確定”ってどういうことだ？」

こいつらは”俺のいた世界”があるとなわかって俺を呼び出したんじゃないって事か…？

「…現在、この人界、神界、魔界の3世界で確認されている種族はいくつかある。その中でも我々に協力してくれた種族は全部で6つ。つまり、代表者は6名いた」

俺の疑問に、アリエルはぼつぼつと語りだす。

「今までは6名でも何とかなつたんだが…。」影の異形”は徐々に力を増幅させ、次第に6名では手に負えなくなりつつあった」
そこまで話して、彼女は俺を見る。

「我々の世界から見て、貴公の世界 異世界の存在は、一応は”存在する”とされている、が、未だ推測の域を出ない”不確定”なものだったのだ」

…”あるかもしれない”レベルの話だったってか…。
いや、それはこちらも同じか。

”こつちの世界”において、こういったファンタジーの世界ってのは誰もが夢見る世界である。

ゲーム、マンガ、小説…。そういったものを介して俺たちはその世界へ”入り込む”わけだ。

”こちら側”と違う事といえば…まあ、こういった世界は”幻想”と呼ばれる夢物語に過ぎない…という認識だということか。

こちらの世界においても多少の差異はあれど、少なくともこういった一大事に持ち出すべきじゃない事柄だったのは同じらしい。

だが、そんな”夢物語”にすらすがり付かねばならないほどこの国

は…いや、”この世界”は切羽詰っているようだ。

「今回の”召喚の儀”もまた、成功するかもわからん賭けだったが…こうして無事に成功した」

そこまで言って、アリエルは立ち上がり、一步前が出る。

「私からもお願いする、”代表者”…いや、シン殿よ、どうか我々に力を貸してはもらえないだろうか」

そう言って、頭を下げた。

一国の姫が頭を下げる。この状況に、周囲の人間も動揺を隠せなかった。

そこまでの彼女に、俺は半ば呆れながらも言った。

「…何度も言うが、俺は”異世界からやってきた勇者様”じゃない。

”ただの便利屋”だ」

どいつもこいつも”救世主”扱いだが…そんなのは柄じゃない。

「さっきのアイツは交渉下手だったが…何度も言うが、俺は”便利屋”なんだから、そんな役回りなら他を当たってくれ」

断る理由として”唐突過ぎる”というのももちろんだが、とにかく柄じゃない”というのもある。

”報酬が割に合わない”という事もあるな。

しがた便利屋が命がけて世界平和のために化け物と戦って？ギヤグだろ…。

「…やはり、金か？」

「もちろんそれもある」

報酬云々に関してはこういう職業では特に重要だ。

「先ほど聞いたと思うが、単に名声だけを得られるというわけでもない。名声だけ…と聞こえはいいが、結局のところ我々から”個人的な褒美”という名目で金銭を渡すのは当然の事だ」

最初っから金銭をちらつかせてたら世間体的によろしくないってか。そういう苦労は凡人の俺には理解できんが…”政治の世界”というものが一筋縄ではいかないということはこの世界でも同じらしい。「…別に俺じゃなくてもいいんだろ？ その”素質”とやらがあれ

ば

”心器”…だったか？ 用はそれが扱えるなら俺である必要は無い。…というか、”素質”がある奴に片っ端から使わせりゃいい気もする。…それは何か事情があるのかもしれないが。

「…簡単に言ってしまうばそうだ。だが、ただでさえ不確定要素の多かった試み。もう一度成功するとも限らん」

「まあ、あるかどうかもわからん”異世界”から”素質”のある人間を呼び出す…なんてのはなかなか骨が折れるだろうな。

呼び出されたのが俺だったことを抜きにするなら、まさに奇跡に近い確立だったのかもしれない。

「…悪いが、俺の返事は変わらないぜ？ そっちの事情に関しては同情するしかないが…」

それでも、俺の返事は変わらない。

俺は”便利屋”。

正義の味方には成り得ない…というより、”便利屋”という職業に善悪の概念は存在しない…と思う。

俺の返答に、アリエルは思案する素振りを見せる。

「ふむ…あまり使いたくは無い手だったが、仕方ないか…」

…なんだ？ 実力行使でもしようってか？

危険を察知して身構える俺に、アリエルは苦笑して

「いや、別に実力行使をしよう、というわけでもない。…ただ、少し卑怯な手になってしまいが」

どうやら彼女の性格的にあまり気に入らない方法らしい。

…だったら使うなという話だが。

「では、”便利屋”であるシン殿よ。私と取引といこうじゃないか…取引？

残念ながら、俺の経験上こういう時にはあまりいい展開にはならない。い。

というか今も嫌な予感がする。

「貴公を呼び出した魔術…あれは我々が独自に開発した”秘術”。

その準備も、使用される魔力もまた膨大なものだったのだ」

…あれか、大掛かりな機械を動かすのに大量の電気や費用が必要な感じか。

「祭壇が大気中の微力な魔力を集め、それを何日も集め続け、初めて魔術が使用できるといふものなのだ」

…あれ？ ”何日も集め続け”？ おい、ちょっと待て、それってまさか

俺の言わんとしている事を察したのか、アリエルは頷き、告げた。

「そうだ。あの祭壇を使用し、魔術を発動させなければ貴公を送り返すこともできない。…そして、魔力が完全に集まるまで数日かかる。つまり…」

今すぐ帰れないってか!!

ああチクシヨウやられたよこの野郎!!

「別に時間の経過は気にしなくていい。貴公がこちらにやってきた直後の時間軸に送り返すと約束しよう」

ありがたいのはありがたいが、そういう問題じゃない。

「…で、取引ってのは？」

もう大体察しがつくが、俺は一応確認のために聞いた。

「うむ。今現在あの魔術を発動できるのは、先ほど貴公と話したレフィリナ、あるいはエンフェルだけだ」

…用は、あんたの命令ひとつで俺をここに留め続けることも出来るってか？

…いやらしいなあ、オイ…。

俺の視線に、彼女は気まずそうに目を伏せて

「無理強いは無理強いは正直言ってしたくは無理。だが、今は最早手段を選んではいられない状態。国を治める立場として、民を不安にさせるわけにはいかないのだ…」

「…」

その気持ちはわからなくもないが…。

「つまり、俺があんた等に協力しないと、俺は帰れないって事か」

どうやら彼女は本当にこういうやり方が気に入らないらしい。本当に不本意そうに頷いた。

…すっごい面倒ごとに巻き込まれちゃったなあ…。

「貴公が”便利屋”というのであるならば、我々への協力を”依頼”したいのだが、…どうだろうか？」

言い回しを変えただけで本質的には同じだが、彼女なりに俺に気を遣ってくれているのだろう。

俺は少しだけ思索する。…選択肢なんて最初からないようなものなのだが。

「…依頼内容は”影の異形の殲滅”。報酬は金品と”元の世界へ送り帰す事”。…でいいのか？」

彼女の話が本当なら、現時点ではこの”取引”に乗る他なかった。俺の問いに、彼女は頷く。

だが、このままでは俺にも意地というものがあるわけで。

「一つだけ条件がある。俺は”代表者”としてではなく、あくまでアンタに依頼された”便利屋”として戦う。…いいな？」

”救世主”とか”英雄”とか”勇者”なんて肩書きは柄でもないし興味もない。

俺は、あくまでコイツに雇われた”便利屋”として参戦する。

「ああ、それでいい。協力に感謝する」

アリエルはそれで十分だとばかりに頷く。

彼女はそれで納得したようだが、周囲にいた連中は動揺を隠せていなかった。

まあ、そうだよな…普通はこういう態度なら誰もが驚くだろう。

だが、彼女はそんな周囲の雰囲気も気にせず微笑を浮かべている。

「これから先、よろしく頼む。シン殿」

「…ああ」

…ホント。面倒なことに巻き込まれちゃったなあ…。

”元の世界に帰る”。それを報酬として、俺は”影の異形”と呼ば

れる化け物との戦いに巻き込まれた。

場所は異世界。右も左もわからない土地、環境での初仕事。

おそらく、今までの常識なんてものは通用しないだろう。

…なかなか、一筋縄ではいかない”クライアントオーダー依頼”になりそうだ…。

…こうして、俺の”便利屋”としての”仕事”が始まったのであった。

第5話 「クライアントオーダー」 (後書き)

嫌々ながらも”便利屋”として参戦することとなったシン。
次回は他の”代表者”との初顔合わせ…の予定です。

第6話 「夜闇の遭遇」 (前書き)

”異世界”で過ごす最初の夜。俺は夜闇に紛れて周囲を探る。
そこで出会った”彼”に、俺は”何か”を感じずにはいられなかつたのだった…。

第6話 「夜闇の遭遇」

「さて…。どうするか…」

あの後、俺は客間へと案内されていた。

客間…というよりは空き部屋といったところか？

俺のことが正式に発表されるのは明日からだそうで、今日は身体を休めてくれとのこと。

とりあえずはこの部屋を自室として使っていていいそうだ。

俺の立場は「一応”アリエル及びこの国の協力者”という名目になっている。

故に寝泊りする部屋や食事、資金といったものはある程度は援助してもらえるらしい。

「ま、住む場所に関してはありがたく使わせてもらおうかな…」

その気になれば全部どうとでもなる問題だが、今のところはとりあえずあの姫さんの厚意に甘えておくとしよう。

コンコン…。

「ん…？」

『し…失礼します…』

不意に聞こえてきたノックの音　と、同時に扉は開かれ、そこから1人の少女が入ってきた。

「はっ…初めまして！ 私、本日よりシン様の家事手伝いをさせて頂きます、リーゼと申しますっ！」

リーゼ…。そう名乗った少女はぎこちなく頭を下げた。

黒いショートカットの髪がさらり、と揺れる。

”あっち”でも見る典型的なメイド服を着ている辺り、言うまでも無く”使用人”^{メイド}なのだろう。

(ん…？ …あゝ。コイツがさっき姫さんの言っていた…)

そもそもなんで使用人が俺の所に来るのか。その理由を考えて、すぐに先ほどの姫さんとのやり取りを思い出した。

話も終わり、城の部屋を1つ自室として使っていていいと言われた俺は、早速踵を返して部屋に案内されようとしていた。

「…と。少し待たれよ、シン殿」
「が、そこで姫さんに呼び止められた。」

「あん？」

「この城に住むにあたって、1つ伝えておく事がある」

「…なんだよ？」

「他の代表者もそうなのだが、”この城での生活において苦勞をかせないように”と、各代表者につき1名ずつ”使用人”を就けることになっているのだ」

「…と、言う事は…。」

「…俺も例外じゃない…ってか？」

「アリエルは頷いて答える。」

「自室でしばらく待っていてくれ。すぐにそちらに向かわせる」

「…で、その”俺担当の使用人”ってのがお前さんなワケか」

「はい！」 “代表者”様の使用人に選ばれるなんて、とても緊張するのですが…精一杯頑張らせて頂きますっ!!」

彼女はそう言って再び頭を下げた。

「…うん、意気込みは十分なんだな。」

「シンでいいっての。その呼ばれ方はあんま好きになれねえわ」
俺はヒラヒラと手を振って言う。

別に”代表者”なんてものになっただけでもないしな。

俺の言葉に、リーゼはきょとん、としていたが、やがて緊張した面持ちで

「でっ…では、シン様、と」

そう、小さく呟いた。

「おう。…でもまあ、折角来て貰ってアレだが、お前さんの仕事は無いかも知れねえなあ…」

俺は”向こう”では当然ながらハードな仕事の日々を過ごしていた訳で、当然養ってくれる人間など存在しなかった。

もちろん1人暮らしである。

用は炊事、洗濯、掃除…。”家事の類は基本的に全部出来るようにはなっている”…と、いうことだ。

「だからまあ…お前さんが手伝わなくても全部できちゃうって言うか…」

「そ、そんなあ…」

俺の言葉に、困ったような…というより最早泣きそうな顔をするリーゼ。

「そんな顔するなって…。家事まで手が回るかどうかもわからねえんだ。とりあえず何かあつたら頼むから、な？」

俺のフォローに、リーゼは多少不安そうな雰囲気を残しながらも「はい…！」と頷いてくれた。

「では、もう夜も遅いですので、私はこれで」

リーゼはそう言って一礼する。

そのまま扉に手をかけたところで

「あっ！ そうでした！」

何かを思い出したらしく、慌てて俺の方に向き直る。

「どうした？」

「えっと…。まだこの城全体にシン様のことが広まっていないので、

”混乱を防ぐためにも今日はなるべく部屋の外を出歩かないように

”、とのことですよ」

…なるほど、確かに知らない奴からしてみれば俺は不振人物だわな。

「…あいよ。”なるべく”出歩かないようにしとくよ」

俺は”一応”そう返答して、ひらひらと手を振った。

俺の妙に含みのある言い方も、リーゼは全く気にした様子もなく

「それでは、おやすみなさいませっ」

そう言うと、そのまま踵を返して部屋を出て行ってしまった…。

「…ピユアな奴だなあ」

そんなことを呟きながら、少し妙な罪悪感を感じる俺だった。

……。

……。

…。

「さて…と」

再び静まり返る部屋。

俺はそっと扉に近付き、耳を当てて外の気配を探る。

…。

(こいつは…丁寧…)

扉の脇に2人、誰かがいる。

僅かに聞こえる金属音から、恐らく鎧を身に纏った兵士だろう。

わざわざこんな下口にいるってことは…見張りか？

「まあ何にせよ、”ココ”から出るのは無理か…」

リーゼには悪いが、俺は”この部屋を出ようと”していた。

理由は簡単。”落ち着かないから”である。

ここは”向こう”の常識がほとんど通用しない世界。

つまり俺は今右も左もわからない状態なのだ。

そんな状況からいきなり知らない場所で”身体を休めろ”なんて…
いくらなんでも無茶な相談だった。

別にこの場所について深く調べる必要は今のところ無いが、とりあえず周囲の情報を得て安心できないと落ち着いて休む事もできない…一種の”職業病”というヤツなのかもしれない。

「とりあえず…外に出るか」

わざわざ見張りがいたんじや扉から出るのとは不可能。ならば次は…と、俺が目をつけたのは”窓”だった。

窓の外はベランダになっており、俺はまずそこから下の様子を伺う。ちなみにここは城の4階。眼下には、さきほどまで俺がいた”あの”石造りの祭壇がある。

見たところ、どうやらここが中庭らしい。

「…」

俺は目を凝らし、耳を済ませて周囲の気配を探る…が、中庭はその静けさを保ったままだった。

どうやら誰もいないらしい。

最も…その少し先に見える高台には何人かの見張りがいるみたいだが…。

「ま、暗くて見難いのは向こうも同じ…ってね」

俺は1人呟くと、袖口に隠して着けている腕輪から金具を引っ張り、ワイヤーを引き伸ばす。

それをベランダの縁の柱に括り付け、先端の金具を括り付けたワイヤーの根元に取り付けて固定…と、これで外れる事はないだろう。

「じゃ、降りますかね…」

俺はそのワイヤーを伝いながら慎重に、ベランダをすすると降りて行った…。

…。

…。

…。

「ふうっ…」

あつという間に中庭に降りる事ができた。

俺は姿勢を低くして周囲を警戒しつつ、腕輪のスイッチを押す。その操作に反応してワイヤーの先端の金具はカチリ、と外れ、そのまま腕輪の巻き取りに引っ張られてこちらに戻ってきた。

「んじゃあ、とりあえず中庭をぐるりと回ってみましようかね…」
ワイヤーの巻き取りを終えた俺は、周囲を警戒したままこの区画を出た…。

祭壇のあった区画を出て、しばらくは薄明るくライトアップされた中庭が続いていた。

「ライトアップといっても、”向こう”にあったような電気のライトというわくでもないらしく、何か水晶のような物が淡い光を放っているようだった。

「これは…機械…じゃないよなあ」

ライトアップされた中庭に咲く花も、見たことあるようなものから初めて見るものもあって、俺はそれらを興味深く眺めていた。

「やっぱり、色々と驚かされることばかりだよなあ…」

改めて、ここが”異世界”なんだと認識した。

さて、そろそろ次へ…。

そう思い、奥に続く道へ視線を移したところで

「こんな夜更けにどうしました？」

「ッ!？」

不意に背後から聞こえた声に、俺は太股の短剣に手を掛けながら振り返る。

「あ、誤解しないでくださいね!? 僕は別に貴方に危害を加えたりはしないので!」

そこには、1人の青年が立っていた。

美しい金色の髪に…尖った耳。

これは…最初に会ったレフィリナという少女と同じ特徴だ。

「道に迷ったのですか? それとも散歩でも?」

青年は微笑を浮かべつつ聞いてくる。

「どうやら俺を”侵入者”とは思ってはいないらしい。」

「まあ…そんなところだ」

俺は短く答えた。

「そうですね…。まだこの城には貴方のことを知らない人もいるので、ほどほどにして下さいね？」

青年はリーゼと同じような事を言うと、俺の脇を通り抜けて奥へと歩いていく。

…ん？ ”これ”は…。

「待て。アンタ、名前は？」

俺は慌てて振り返り、青年の背中に声を掛けた。

青年は歩みを止め、ゆっくりと振り返ると、相変わらずの微笑で

「自己紹介は明日にしましょう。では、お休みなさい、”シンさん

”」

そう言って、夜闇の中に消えていった…。

「…あいつ…」

…見つけたな。仕方ない、そろそろ戻るか。

俺は十分探索した、と自身を納得させると、再びベランダから自宅に戻るために踵を返したのだった…。

第6話 「夜闇の遭遇」 (後書き)

正式な顔合わせは次回に持ち越し。

とつとつ受験云々の波に飲まれそうだ…。

第7話 「心解の儀」 (前書き)

夜も明けて翌日。大衆の前で俺は参戦を発表する。

そこで出会ったのは俺以外の”代表者”。

新しい出会いと共に、俺は幻想世界での”試練”に挑む事となったのであった…。

第7話 「心解の儀」

「ん…朝か…」

閉じた瞳に薄明かりを感じて、俺は眼を開けた。

昨日はあの青年に遭遇してすぐ自室に戻り、特にする事も無かったので眠る事にした。

実感は無かったものの、やはり突然の事だらけで精神的に疲れていたんだろう。まだ少し身体が気だるい。

…まあ、このやたらとふかふかで上等なベッドが落ち着かなかったつてのもあるんだが…。

俺はゆっくりと上体を起こす。窓のほうに視線を向けると、まだ明け方なのか、カーテン越しに見える外の光は弱かった。

「今日は確か…俺のことを正式に城の連中に公表するんだっけか？」
なにか言わないといけないのだろうか…？ こう…決意表明とか。

「…特にねえよな…」

あの姫さんに”依頼”されただけだから特に私情は無かったりするわけだが、はてさてどうしたものか…。

と、そんな事を考えていた時だった。

コンコン…。

という控えめなノックの音と「失礼します…」というこれまた控えめな声。

と、その直後に扉が開かれ、昨日挨拶を交わしたリーゼとかいうメイドが顔を覗かせた。

「あ…あれ？ シン様、起きてらっしゃったんですか？」

俺がまだ寝ていると思っていたのだろう。リーゼは俺と眼が合うと、慌てて俺に一礼した。

「おはようございます。シン様…あの、寝心地がよろしくなかつ

たのでしょうか…?」

「おう、おはようさん。元々俺はあんまり寝ない人だから、気にすんな」

予想外の出来事に戸惑うリーゼだったが、俺がそうフォローするとすぐに気を取り直して

「えっと…今日は朝食の後にシン様のことを王宮の皆さんに公表する…このことです」

やっぱりか…。

あまり気乗りしないが…どの道顔を覚えてもらわないとこの城で自由に動けないか…。

「他の”代表者”とやらも来るのか?」

「そうですね。恐らく顔合わせも兼ねると思います」

俺の問いに、リーゼは頷く。

昨日の話を聞く限り、”代表者”という役柄はこの国 いや、

”この世界”において非常に重要なポジションである。

俺はそんな役柄ゴメンだと拒否した身だが…やっぱりそういう重要な人物とはコンタクトを取っておきたい。

「昨日の今日でお疲れかと思いますが、今日はシン様も忙しくなるかと…」

「…だよなあ」

まあ、俺にとつての”忙しくなる”は、多分リーゼの言ってる”それ”と意味が少し違っていているのだろうけど。

「…ま、考えても仕方ないわな。朝食の準備はできてるのか?」

「いえ、もう少しかかるかと。すぐにお持ち致しますようか?」

「…そうだな。すぐ頼む」

俺の返答を聞くと、リーゼは「かしこまりました」と頭を下げる。

…うーむ。

「…お前、さ」

「はい?」

「なんか昨日よりかなり緊張抜けたのな?」

「はあう!?!」

俺が指摘すると、リーゼはいきなり素っ頓狂な声を上げた。

「お、おい。どうしたんだよ?」

俺が慌てて声をかけると、リーゼは潤んだ瞳でこちらを見てきた。

…なんか、一気に昨日の雰囲気に戻ったような。

「うう…言わないでくださいよお…意識しちゃつとまた緊張してきて…」

「…」

どうやら、結構気を張っていたらしい。

…なんとなく、リーゼがどういう奴なのかわかったような気がした。

……………。

……………。

……………。

「こちらが訓練場になります」

「お〜…」

俺の目の前には、広い芝生に木でできた人形が数体置かれている…まさに”訓練場”があった。

奥に石造りの建物がある。あれは屋内訓練場…と言った所か。

あれからしばらくして、俺は運ばれてきた朝食を食べ終えた後、リーゼに城の案内を頼んでいた。

ある程度俺のことは伝達できたため、目立たない程度ならば出歩く事が許されたのだそうだ。

…ちなみに異世界の料理という事で、向こうじゃ見たこともないような食材を使用した見たこともない料理が運ばれてくるの後思いきや、いたって普通のパン、スープ、サラダの洋風朝食だった。

食材に関しても特に見慣れないものは無し。食材の名称や料理の名前を聞いても、全て向こうと同じものだった。

…どうやらそういう点においてはこっちも向こうも同じらしい。ま

あ、いきなり見慣れないものばかりだと自炊の際に苦勞するのだが…。
…まあとにかく、しばらくはこの城が拠点となりそうなため、ある程度の構造は頭に入れておきたかった。のだが…

「えっと…次は…えっと…」

「…おいおい」

さつきからリーゼは何度か道を間違えたり、迷ったりしてウロウロしている。

…ていうか、この城で働いてるメイドなのに地図無いと行動できないってどうなんだろう…？

外から見た限りじゃ確かに広そうではあったが、大体似たような役割の部屋や空き部屋も多かったため構造を覚える事自体は簡単そうなんだが…俺が変なのか？

とりあえず俺は地図と格闘しながら歩くリーゼの後ろをついて行く。
と…

「あ…」

「あら、”代表者”様。おはようございます」

廊下で見慣れた顔と会った。

「エンフェルに…レフィリナだったか？」

「…」

「まあ、覚えていただけたなんて光栄です」

俺の言葉に笑顔を浮かべるエンフェル。それと比べてレフィリナの方は黙ってこちらを見つめている。

…心なしか睨まれているような気がする。

「シンでいいつつの。…ったく、この連中はみんな俺のことをそう呼びやがる」

「それは仕方ありませんわ。貴方の意思は別にして、この国の多くの人々がシン様に希望を抱いておりますもの」

「…そういうもんかねえ」

まあ、俺の意思云々よりも”代表者”として呼び出された俺の存在

そのものに希望を抱かずにはいられないんだろうな。

…肩書きなんつーマスコットみたいなもんで何とかなるなら、よっぽど楽なんだろうが…。

「今日の催しには私たちも重要な役割が任されているので、とても緊張しているんです」

「催し？ 俺の公表か？」

エンフェルは相変わらず穏やかな表情のため、ちっとも緊張感が感じられない。

「それもありますけれど…他にもシン様にはやってもらうことがありますので」

「マジかよ…」

どうやらリーゼの言ったとおり。俺は今日かなり忙しくなるらしい。

「それほど大変な事ではないと思いますよ？ …では、また後ほど」

「…」

2人は頭を下げると、どこかへ歩いて行ってしまった。

…昨日と比べてレフィリナが妙に静かだったのが気になるな…。

「シン様。そろそろ行きましょう」

リーゼに促されて、俺たちは再び歩き出した…。

……………。

……………。

……………。

「これで大体は見て回ったかと思いますが」

「そっか。ありがとな」

リーゼの危なっかしい足取りに不安になりつつも、俺は無事に城の探索を終える事ができた。

今は中庭に設けられたベンチに2人して腰掛け、休憩している。

「城も流石に綺麗なモンだが、中庭も手が込んでるな」

花壇や噴水。そういったオーソドックスな物の組み合わせだが、広

さや豪華さもあって、中庭はちょっとした自然公園のようになっていた。

昨日は真夜中で暗く、全体を見ることはできなかったが、こうして改めて見てみるとなかなか美しく作りこまれている。

「まあ、俺は芸術の良し悪しなんてのは良くわからないから、なんとなく感じたことしか感想にできないのだが…。」

「この庭のデザインは姫様がお考えになられたんだと聞いた事があります」

「あの姫さんがか？ 意外だな。なんとも武人氣質な奴だと思ってたんだが…」

昨日話した限りじゃ、こんな風に庭造りに力を入れる人物とは思えなかったんだが…。」

俺の呟きに、リーゼは思わず苦笑する。

「姫様。ああ見えてガーデニングが趣味なんですよ。ただ花を育てるだけじゃなくて、庭そのものを誰もが癒されるような空間にしたかったそうで…」

どうやら、現在の形に落ち着くまでに何度も作り直したんだそうだし、金持ちの感覚という奴なのかもしれないが、なんとも豪快だといえる。

だが、そういう話を聞く限り、かなりこだわりがあるのだろう。

「姫様の父である先代の国王様も同じような”こだわり”をお持ちになっていたらしく、この城の外観や構造をお考えになられたんだとか」

「まさに”親子”なんだな…」

この城を全体的に見てみたが、まず客人用の空き部屋こそあれ、それ以外に無駄な部屋が一切無い。それに構造にも無駄が無かった。多くの人間が暮らし、出入りする場所としても快適であり、時に外敵から身を守る”軍事拠点”としても十分すぎる設備がある。

「どうやら先代の国王はそういった点ではかなり優秀だったらしい。

「さて、これからどうするか…」

「まだ少し時間がありますね…」

城もほとんど見て回り、得にする事もなくなった俺達は、何をするでもなくぼんやりと中庭の風景を眺めていた。

「お？ アンタが噂の”異界人”か？」

…と、不意に背後から声が聞こえてきた。

「…？」

俺達は揃って振り返る。

「お、リーゼか。おはようさん！」

そこには、1人の男が立っていた。

肌の色が若干黒く、赤くてツンツンとした髪が特徴的だ。

…が、それ以上に特徴的な点がいくつか。

まず、袖の無い服から露出した健康的な太い腕や、顔に刻まれている刺青タトゥーらしきもの。

それだけでもかなり特徴的だが、その他には、レフィリナや昨日遭遇した青年ほどではないにしろ、少し尖った耳。

そして額に埋め込まれたように光る”宝石のようなもの”。

最後に、その金色に輝く瞳には、獣のような縦長の瞳孔が覗いていた。

(これまたなんと個性的な奴が…)

「ん？ オレの顔になにか付いてるのか？」

無言で見つめる俺が気になったのか、男は不思議そうに首を傾げる。

「ああ、いや…。」 “ここ”にはいろんな奴がいるんだなあと思つてさ」

俺は苦笑しながら言う。

「ふむ…。」 “こういうヤツ”は見慣れねえか？」

そう言つて男は、額の宝石を親指でくい、と指す。

「まあそういうのも含めて…かな」

「へえ。…オマエさんはあんま変わったところはないんだなあ。」

“じんぞく人族”とそっくりだが…なんというか、雰囲気みたいなモンが違う」

”人族”…昨日レフィリナから聞いた話によると、主にこの世界

”人界”に住んでいる最も個体数が多い種族…だったか？

確かにこの城の連中には外見的特徴が向こうの人間と変わらない奴も大勢いた。

ただ、”雰囲気が違う”というのは…そこまで読み取れるこの男は、優れた洞察力や感覚の持ち主なのかもしれない。

「この世界じゃアンタや…あの”神殿の巫女”みたいな奴は珍しく…ないんだよな？」

俺の問いに、男は少し考え込むしぐさを見せる。

「どうだろうなあ…。」神族”や”魔族”はともかく。”竜族”や”エルフ”は基本的に他種族と関わりを持たねえから…。」

「ん…アンタは…？」

「ああ、オレは竜族だよ。ホラ」

そう言つて、男はツンツン髪を少し分けてみせる。

見ると、確かに後頭部付近から後ろに向けて2本の角が生えていた。…なるほど。縦長の瞳孔はそういう理由か…。

「確か、今日オマエさんの事を城のヤツらに発表するんだよな？

色々忙しいとは思うが、まあ今日一日は我慢してくれよ」

「…あ、そろそろ行ったほうがいいのかもしれませんね」

突然リーゼが声を上げる。どうやら時間が近いらしい。

「おっと…確かにもうそんな時間か。…じゃ、また会おうぜ、”異界人”」

男はそう言つと、王宮の方へと歩いていった。

「あれが竜族か…」

レフィリナをはじめ、いろんな特徴のある連中がこの城にはいたが、あそこまで特徴的な種族は初めて見た。

向こうとは違うファンタジー一色なこの世界は、いろんな意味で興味深い。

「シン様？ どうしました？」

リーゼは座ったままの俺を不思議そうに見ている。

「ん、いや。なんでもない」

俺は立ち上がると、リーゼの後に続いて王宮へと入って行った…。

…。
…。
…。

「今回、新たに”異界”より代表者が選定され、この地に召喚された。我等と共にこの世界を脅かす”敵”と戦う同士を、我々は快く迎えようではないか」

扉の向こう　大広間では、アリエルが何やらご大層な口上を述べていた。

同士だとか代表者だとか言うのは名目上勝手にしてくれて構わないが、やはりあまり良い気分はしない。

「では、代表者”シン殿”」

俺を呼ぶ声と共に、無駄に大きな両開きの扉が開かれる。

…と、同時に、一斉に俺に集まる視線。視線。視線。

昨日の騒動を見て俺のことを知っている連中は、なんとも複雑そうな表情を浮かべ、ひそひそ話をしているし、そうでない者は、最初の時みたいに好奇の視線を俺に向けていた。

「…うわぁ…」

俺は小さくため息を吐く。…やってらんねえよなぁ、こつこつ注目の的になるってのはさぁ。

俺は渋々ながらも左右に人が別れて出来た道をまっすぐとアリエルの方へ向かって歩いていく。

左右の人ごみの中には、城の中ですれ違った者も何人かいた。…奥の方にリーゼの姿も見える。

やがて、俺がアリエルの座る上座の前まで着くと、そこには数人の男女。それに、見知った顔が何人かいた。

(こいつらは…)

まず、上座の横にレフィリナとエンフェルの2人。…まあ、この2

人はいると思っていた。

だが、意外だったのは、昨夜中庭で遭遇した青年と、先ほど話した竜族の男がいたことだ。

人ごみの中にいるのなら、彼らはただの”見物人”ということだろう。

だが、この国の”要人”であるレフィリナとエンフェルもいるこの位置にこの2人がいるということは、彼らを含めこの付近にいる男女は全員何らかの”要人”ということになる。

(…)

2人のほうを見ていると、不意に目が合ってしまった。

男のほうは笑顔で軽く手を上げ、青年は相変わらずの笑顔で軽く頭を下げる。

「紹介しよう。彼が”異界”より召喚された”代表者”。シン殿下」
アリエルの言葉に合わせ、俺は背後を振り返る。

…ここからは、周囲の人間の顔、視線が、よく見えた。
どいつもこいつも色んな感情を込めて俺を注目している。

「…」

”注目的になる”事は、あまり好きじゃない。
別に性格とか、好みの話じゃない。

…思い出したくも無い事を、思い出しそうになる。

「…シン殿下？」

「…え？」

上の空になってしまっていたらしい。アリエルの声で気を取り直した俺は、軽く頭を振って思考を中断した。

ここにいる全員が、改めて俺を注目する。

…さて、これはなにか俺が言うパターンのヤツか？

…決意表明？ いやー…特に考えてねえってのに…。

「…あー、つと」

しかし、ここで俺が沈黙していてもしょうがない。

…というか、ここにいる半分以上の人間が、昨日の俺の”決意表明

”を見ているのだ。

ならば、とことん正直になってやるうじやないか。

…っていうか、別に隠す事でもないしな。

「…成り行きでこんなクソ面倒くさい戦いに巻き込まれた”便利屋”のシンだ。はつきり言つてこの国の末路だとか大衆の命だとかには欠片も興味はねえが、金と元の世界に返る事を”報酬”として、俺はこの戦いという名の”依頼”^{オーダー}を引き受けようと思う。よろしく頼む」

…。

「…」

沈黙。の後に

ざわざわざわざわっ！！

一気にざわめく周囲の人。

振り返ると、アリエルは何とも複雑そうな顔でこちらを見つめていた。

…別に嘘は吐いてないぜ？

そついう思いを込めた視線を送り、俺はニヤリと笑ってみせる。

それを見たアリエルは一つため息を吐くと

「静かに！」

と、ざわめく人々を一喝した。

「ん、コホン。…さて、シン殿にはこの後、導師エンフェル殿による”心解^{しんかい}の儀”によって心器を授かり、その後”心解の試練”を受けもらう」

「…は？」

何ソレ。聞いてないんだけど。

試練？ あ、ソレで忙しいの？

…ええ…。

「改めて、”異界の便利屋”。シンだ」

あれからしばらく見物していた連中との挨拶云々があるそうなんだが…どうやらさっきの俺の発言で挨拶に来るような物好きは消えたらしく、省略してさっさと”心解の儀”とやらの準備に取り掛かる事となった。

正直、心にも無い”社交辞令”のやり取りなんざ俺は死ぬほどゴメンなので都合がいい。

今大広間に残っているのは、レフィリナとエンフェルを除く上座の前にいた男女数人と俺。

もちろんあの2人も含めてだ。

「エルフ族の代表者、エリオル・ユレイユといます。改めてよろしくお願ひしますね。シンさん」

昨夜遭遇した、金髪に尖った耳の青年が、相変わらずの笑顔で頭を下げた。

…なるほど、やはりここにいる連中は俺以外の”代表者”ってことか。

「竜族の代表、アゼル・クロウフォードだ。お互い頑張ろうぜ、シン」

先ほど中庭で会った竜族の男　アゼルは、そう言って手を差し出した。

俺はソレに無言で答え、握手を交わす。…見た目通り力強い。

さて、ここからは初顔合わせの面々だな…。

「ねえ…2人とも…コイツ、さっき無茶苦茶な事言ってたけどさ、ホントに信用していいわけ？」

2人の間を飛び交う小柄な…というか俺の脛ほどの大きさしかない羽の生えた”何か”が、2人に話しかけていた。

「…なんだ？このちっこいのは…」

「小さいですってえ〜!？」

その小さいやつは、俺の発言が気に入らなかったのか、瞬時にこちらに向かつて飛んでくる。

「初対面のレディーに向かつて失礼じゃない？ アンタ！」

「まあまあ落ち着いてください、ユミルさん」

「でもさあ……」

ユミルと呼ばれた小さいやつは、不服そうにエリオルに振り返る。

「なんでコイツ、こんなに小さいんだ？」

「アンタ、また……！」

「まあ、落ち着けつて。な？」

「彼女はユミル・フィール。妖精族の代表です」

”妖精”…なるほど、それでこんな格好なのか。

「言つとくけど、アタシはアンタの事まだ信用なんかしてないんだからねっ！」

そう言つて、ユミルはぷいっとそっぽを向いてしまった。

「……で？ 向こうにいるのは？」

俺は向こうで背中を壁に預け、ただ無言でこちらの様子を伺っている。尖った耳に褐色の肌、そして銀髪の人に視線を向けた。

「アイツはレク。魔族の代表だ」

「ふうん……」

レクと呼ばれた女は、その真紅の瞳でただじつとこちらを見詰めている。

「……」

しばし、交差する視線。

…不思議と、俺と似たような雰囲気を感じた。

…さて、今ここにいるのはこれで全員なわけだが……。

「…代表者つて俺入れて7人だろ？ 後2人はどうした？」

そう、後2人…話の通りなら神族と人族の代表者の姿が見えない。

「ああ、1人はさっきまでいましたよ。人族代表のローウェルさんです」

「ん……いた？」

謎の過去形に、俺が不思議そうに問い返す。

「ローウェルさんはアリエル様の護衛なんですよ。だから一緒になつて出て行きました」

「ああ、なるほど…」

初めて謁見の間に入ったとき、玉座の後ろに感じた気配は、おそろくそいつだったのだろう。

これで疑問が一つ解けたな…。

「どんなヤツなんだ？」

俺の問いに、気まずそうな顔をする一同。

「…どうした？」

「それが…」

「ローウェルは、レク以上に無口でなあ。普段もフードと仮面で顔を隠してるんだよ」

「…は？」

何その謎人物。そんな怪しいやつが護衛で代表者でいいんだろうか。

「でも、剣の腕は一流よ。実力に関しては十分信用してるわね」

「ふうん…」

フードに仮面。そしてアリエルの護衛、か…。なら姫さんと会ったりや自然と見る機会もあるかな。目立ちそうだし。

「もう1人は今は私用で隣国に行ってます。ついこの前出たばかりなので、もうしばらくは帰って来ないかと思いますが…」

「なるほどね…」

つまり、その1人を除いて、ここにいる4人とさつき出て行った1人が俺以外の”代表者”なワケだな。

これから先、様々な場面で顔を合わせるであろう面々を、俺はしっかりと記憶した。

「…それで、”心解の儀”って何なんだ？」

自己紹介も終わり、俺はこの後の予定である”心解の儀”とやらの詳細を聞いていた。

「簡単に言つと、エンフェルの魔術で”心器”を創る儀式…だよな？」

アゼルが隣のエリオルに聞く。

「ですね。正確には”心器”を対象の心に創り出し、いつでも取り出せる状態にする…のだそうです」

何とも複雑な話だ。だがまあ、用はエンフェルの力で”心器”とやらが使えるようになるらしい。

「じゃあ”心解の試練”は？」

「あれは単純な話、城下町の人々の前でのお披露目会…といったところですね。大衆の前で心器を用いて魔物と戦い、勝利する事で新しい代表者の存在を発表するんです」

”心器”のテスト、とも言えそうだな。その程度の敵も倒せないのなら、代表者である資格は無いと、恐らくそういう意味合いもあるのだろう。

…俺から言わせてもらえば、それが今日一番疲れるイベントに他ならないのだが。

「…」

「まあ、みんなもやった事だ、チャツチャと済ましちまおうぜ？」
見るからに面倒くさそうな俺を、アゼルは背中をバンバンと叩きながら励ました。

…と、ちよつどその時、

「シン様。”心解の儀”の準備が整いました。こちらへどうぞ」という声と共に扉が開かれ、数人の使用人がやって来たのだった…。

第7話 「心解の儀」 (後書き)

～追加用語～

【エルフ族^{ぞく}】

カテゴリー：種族

主な登場作品：全般

～概要～

主に”人界”に多く住まう種族。

身体的特徴は、長く尖った耳と金色の髪。そして美男美女が多いということである。

身体能力は人族に劣るものの、魔法技術に秀で、精霊との意思疎通が可能である。

自然を重んじており、機械技術や文明の発展によって自然を破壊する人族は”劣等種”、”穢れた種族”と見下している者が多い。それ故に得る付属の多くは人里離れた森の奥に集落を作り、多種族との関わりを断っている。

例外として妖精族とは友好的で、協力関係を結ぶ事も多いようだ。

【心器^{しんぎ}】

カテゴリー：武具・道具

主な登場作品：～Samon Hearts～

～概要～

とある国で選定された”代表者”が用いていたとされる”心を具現化した武具”

その力、形状は持ち主の心情、思想を反映しており、持ち主の精神状態に応じてその能力を上昇させると言われている。

【代表者】だいひょうしや

カテゴリー：文化

主な登場作品：Samon Hearts

概要

とある国が選定した”影の異形”を倒すため、各種族から一人ずつ集まった者達の肩書き。

彼らは”心器”と呼ばれる特殊な武具を用いて戦い、”影の異形”を退け、国を救ったものには”英雄”、”勇者”、”救世主”としての名声や地位が約束される。

【妖精族】ようせいぞく

カテゴリー：種族

主な登場作品：全般

概要

主に人界に多く住まう種族。

元は神族が使役する精霊の一種だったが、その中でも特に力を持ち、人並みの知能を持った者が”妖精族”として独立した。

人間と契約する事でその者に従い、力を貸すという点では精霊との違いは無い。

マナを吸収してさえいけば老化も死ぬ事も無く、その点では不老不死であるが、戦闘によってマナが失われると跡形も無く消滅

”死”を迎えることとなる。

身体的特徴は背中に生えた半透明の羽と、その多くが人族の子供程度の大きさしかないということである。

背中に生えた羽は数が多いほどその者の力の強さを表しており、最大で8枚となる。

多民族とは関わりを断っているわけではないが、妖精族と無理矢理契約し、使役しようとする人間が多い事から警戒心が強く、人の多いところではあまり姿を見せる事は無い。

【竜族】リウジュ

カテゴリー：種族

主な登場作品：全般

～概要～

主に人界に多く住まう種族。

人界に多く住まう種族の中で最も大きな力を持っており、寿命も長い。

身体的特徴は身体の刺繡タトゥーと後頭部の角、そして縦長の瞳孔である。

エルフ族と違い、多民族を見下しているわけではないが、基本的に多民族の営みには無関心であり、人里離れた場所に集落を作る。

身体能力、魔力共に非常に高いが、その力の大きさは固体によって様々である。

遅れて申し訳ありませんでした。

もう今更かと思いますが、プロローグと用語集をそれぞれ独立した小説として切り離し、この「Samon Hearts」を含めて「Heart's」というシリーズで括りました。

突然の変更、申し訳ありませんでした。

週一更新というスローペースのため、最近は一話一話を長くしているように感じています。

…と言っても、最近すっかり忙しくなってきたので余裕があるのが微妙なのですが…。

次回は久々の戦闘回の予定です。

その前にキャラが増えてきたので登場人物紹介でも書こうかな…？
その辺りはまた検討します。

お楽しみに。

第8話 「心解の試練」 (前書き)

心に”器”を授かり、俺が挑むは幻想世界の”試練”。
そこで待っていたのは、数多くのイレギュラーであった…。

第8話 「心解の試練」

「ようこそシン様。お待たせして申し訳ありません」
使用人に案内されてやってきたのは城内にあるなかなかの大きさの
神殿。

やはりこの国にも宗教とやらはあるようで、案内される途中で祈り
を捧げている神官が数人見えた。

…こういう雰囲気は、どうにも好きになれないな…。

「シン様？ どうかありませんか？」

「…と、いや、何でもない」

…いかにいかに、またどうでもいい事を考えていたみたいだ。

「…で？ 俺は何をすればいいんだ？」

ここに来るまでの神殿の内部もなかなか神秘的だったが、ここは
その中でも特にすごい。

巨大な皿のような台座に透き通った水が壁から流れ、台座を満たし
ており、その中央の壇上へ続くように細い道が淵から伸びている。

周囲は薄暗いが、昨日中庭でも見た水晶のような物が淡い青の光を
放っており、それがこの部屋の神秘的な雰囲気を際立たせていた。

「こちらに」

エンフェルは中央の壇上の上から俺を呼ぶ。

俺は興味深く周囲を見渡しつつ、エンフェルの下へと歩みを進めて
いった。

「これから、貴方の心 ”魂” とも呼べましょうか 器具
現化させるための”器”を創ります」

そう言っつて、エンフェルは俺に近寄ると、俺の心臓の辺りに両手を
かざし、ゆっくりと眼を閉じた…。

「リラックスして…ただ穏やかな心でいて下されば結構です」

ポオオ…。

「…これは…？」
エンフェルの両手が淡く輝いている。と、同時に、俺の身体も妙な感覚に包まれている事を感じていた。
暖かな…少なくとも不快ではない。むしろどこか安心感を与えるような、そんな居心地の良さだった。

「『 彼の者は強き意志を秘めた”選ばれし者” 』」

俺がこの不思議な感覚に身を委ねていると、エンフェルが小さく、だが良く透き通る声で言葉を紡いでいた。

「『 其は”力”。光と共に、闇を穿つ心の”力” 』」

「…？」
何だろう。

エンフェルの言葉が紡がれると共に、自分の身体の中に、何かが形作られているような気がする。
まだその形も、はつきりと認識できないが…

「『 与えるは”器”。”力”を宿し、彼の者に心を振るう”器”を与えたまえ…！ 』」

だんだん、その形がはつきりと捉えられるようになってきた。

あれは…輪のような…

「シン様？ 大丈夫ですか？」

「あ…れ…？ 俺…え？」

エンフェルの呼びかけで我に戻る。

自分の身体を色々見てみるが、特に変わったところは無い。

「できたのか…?」

俺の問いかけに、エンフェルは笑顔で頷く。

「ええ、問題なく。貴方の内には既に”心器”が形作られています」

「…」

再び、自分の身体を見てみる。

…確かに、何かが見えたような、不思議な感覚はしたのだが…。

「本当に変わったのか? その”心器”とやらの使い方すら知らないんだが…」

「…」

全く実感が沸かないので、心配になってエンフェルに問い返すが、

エンフェルは笑顔のまま

「”時”が来れば、心器の方から呼びかけてくれると思います。大

切なのは”信じる事”。それは貴方の”心”なのですから」

「…」

笑顔でそう説明されるが、相変わらず実感は沸かないままだった…。

Another Side

「…まったく! 何なのだあの”異界人”は!」

ガン! とグラスをテーブルに叩き付けて、小太りの男性は目の前の男に愚痴を零した。

ここは城内の一室。多数の調度品や、豪華なベッドなどが、男の地位や性格を物語っていた。

「…今までの”代表者”とは思想も大きく違っている様子…。今までのようにはいかぬかと…」

愚痴る男を前に、静かにグラスを傾ける男は冷静に告げた。

「…フン！ まったく…面倒事を増やしてくれ…」

小太りの男は、相変わらず不機嫌そうにぶつぶつと呟いている。

「…私に考えがあるのですが」

それを見かねたのか、男は相変わらず冷静に告げた。

「…考え、とは？」

「…あの”異界人”の試練。そこに細工をします。…何、既に手筈は整えております。…仮に失敗したとしても、”単なる事故”として済むように、ね…」

男はそう言つと、薄く笑う。

…城内の一室。そこに、確かな”悪意”が動き出そうとしていた…。

Another Side Out

「緊張、してますか？」

「いんや、全然」

あれから俺はすぐに城外 城下町まで連れ出され、その一角にある闘技場に案内されていた。

”試練”のことは既に広まっていたらしい。観客席には既に人が大勢いて、控え室のここからも騒がしい声が聞こえてくる。

俺は心配そうなりーゼに顔色一つ変えずに答えた。

「ず、随分落ち着いてるんですね。私、何もしないのに妙に緊張してしまつて…」

俺なんかよりずっとりーゼのほうが落ち着き無くそわそわしている。そんなりーゼに、俺は軽く笑って

「まあ、こういう雰囲気には慣れてるんだよ。職業柄な」

と言って、ポンと頭に手を置いてやった。

…と言っても、別に全く緊張していないわけではない。

”戦場”特有の緊張感…とでも言えばいいのか、とにかくそういうのは感じているし、何より相手は”魔物”だ。人間じゃない。

魔物…つまりモンスターだ。向こうじゃおとぎ話の存在でしかない”化け物”…そんな奴と戦うと思うと、自然と気は引き締まる。

話じゃギリギリまで助けは無いらしいし…ヘタすりゃ死ぬとまで言われた。

用は…ここを乗り越えられなきゃ、これから先俺はマトモに戦う事すら出来ないってワケだ。

「…シン様」

リーゼは頭に俺の手を乗せたまま、心配そうに上目遣いでこちらを見る。

「…ま、軽く終わらせて帰ってくるわ」

そんなリーゼに、俺は明るく笑って答えたのだった。

……。

……。

……。

「これより、”心解の試練”を行う！」代表者”シン。前へ！」

時間になり、闘技場にありがちの鉄格子の前で待機していると、小うるさいファンファーレと共に、姫さんの声が聞こえてきた。

…と同時に、目の前の鉄格子がガラガラと音を立てて開かれる。

さっきまでずっと薄暗い室内にいたせいで、ずいぶんと眩しく感じる。

俺は軽く目元を押さえながら、ゆっくりと前に踏み出した。

ワアアアアアアアーーーーー！！！！

「うおっ…」

俺の姿が見えると同時に、一気に耳に飛び込んでくる歓声。正直うるさくてたまらん。

次第に眼が慣れてきたので見渡してみると、周囲からの視線、視線、視線。

そして観客席よりも一段高いテラスの部分には、無駄に豪華な椅子に座るアリエルの姿があった。

近くにはエンフェルやレフィリナ。他の代表者たちの姿もある。

「注目的」は苦手だつてのになあ…」

そんなことを呟いていると、ゴゴゴゴゴという大きな音と共に、この広場の外周が壁に収まってしまった。

「…え、なにコレ？」

ちよつど観客席と広場の間に大きな溝が出来た感じになった。

下を覗いてみると、随分と高い。眼を凝らしてみると、底には無数の剣が上を向いていた。

「…落ちたら串刺しってか」

コレばかりは命の保障は出来なさそうだ。

ガラガラガラガラ…

「…あん？」

俺が溝を見ていると、不意に鉄格子の開かれる音。

見ると、俺の出てきた反対側の鉄格子が開かれている。

「…ッ」

奥のほうは暗くてよく見えないが、そこから感じる視線と、殺気。

俺はすぐさま身構える。

殺気は人間のものと良く似ている。が、それ以上に野性的で…荒々しい。

…姿の見えない相手を、俺がしつと睨みつけて、数瞬の後。

そことは区切られたテラスの上では、その観客たちとは違う意味での騒ぎが起こっていた。

「あれは…」カース・レオ”！？ 姫さん、ちと強すぎねえか！？」

「おかしい…用意した魔物はもつと低級のものだったはず…あれでは本当に…！」

「みなさん、何の騒ぎですか！？」

動揺する一同の下に、エリオルが慌てた様子で駆けてきた。

「”試練”に用意された魔物が、予定と違うんだよ！」

アゼルは早口で説明すると、すぐに闘技場　　シンの方へと向き直る。

「ちよつと、どうするのよ！？ 加勢したほうがいいんじゃない？」

「…いえ、今しばらく様子を見てみましょう」

声の主…エンフェルはそう言ってすぐにでも飛んで行きそうなユミルを制する。

その意外な発言に、一同は揃ってエンフェルに注目した。

「…どうということだ？ エンフェル殿」

アリエルの問いに、エンフェルは一礼して告げる。

「私は、彼の内に大きな可能性を感じたのです。だからこそ彼はレフィリナの”選定”によって召喚された…。彼ならば高位の魔物も、あるいは　　」

エンフェルはそう言って闘技場の方へと視線を移す。

闘技場ではシンが魔物の攻撃を必死に避けて様子を伺っていた。

「…確かなのか？」

アリエルの問いに、エンフェルは再び視線を戻す。

「…はい」

その問いに、エンフェルはしっかりと頷いたのだった…。

『グ……』

短剣は化け物の胴体に突き刺さり、一瞬化け物の動きが止まった。どうやらちゃんと利いているし、痛覚もあるらしい。

一つ、問題があるとするならば…

『グアアアアアア……!!』

「…っ！」

化け物の身体は大きく、この短剣では恐らく致命傷を与えるのが困難ということだった。

俺は腕輪のスイッチを操作し、ワイヤーを巻き取って先端に連結した短剣を回収する。

…さて、こうなると別の武器が必要になってくるのだが…。

「…」

俺はそつと自分の胸元に手を当てる。

先ほど手に入れた”心器”とかいうヤツを…使っしかなさそうだ。

「得体の知れないモンはあんま使いたくは無いが…！」

俺は手をかざす。

思い浮かべるのは先ほど感じた”何か”。

さあ、出て来い、”心器”とやら！

…。

「…ん？」

……。

腕に意識を集中させてみる。

……。

「…アレ？」

特に何も起こらない。

え、アレ？ ていうかコレ…。

『ガアアアアアア！！』

ビュン！！

「出し方わかんねーよ！？」

叫びながら、後ろに倒れこんで爪を回避する。

…なにが”信じる事”だよクソ！！ 何にも起こらないよ！？

即座に後転して距離をとる。

テラスの方が妙に騒がしいが…何かあったのか？

エンフェルの方に視線をやる…と、眼が合った。

俺は真剣な顔つきでこちらを見ているエンフェルに手を振って無理だとサインを送ってみるが、はたして通じたかどうか…。

『ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！』

ビュウン！！

「…つとあ！？ クソ…」

さて…”心器”の使い方がわからない以上、この短剣で戦うしかないさそうだな…。

「…なぜ、あの人は”心器”を使わないのでしょうか？」

無言で闘技場を見据えるエンフェルに、レフィリナは訝しげに問いかけた。

「…だな。そろそろ使えるようになってもいいはずなんだが…」

「出し惜しみ…ではなさそうだな」

その問いに、他の面々も不思議そうに呟く。

「…！ まさか…」

エンフェルはしばらく無言で闘技場を見据えていたが、突然はっと息を呑んだ。

「どうしました？ エンフェル様」

レフィリナが恐る恐る聞くと、エンフェルは口元に手を当てたまま呟いた。

「”心器”が…使えないのかもしれない」

「なっ!？」

その呟きで、周囲が再び動揺する。

「ちよつとまで！ ちゃんと成功したんじゃないのかよ!？」

「ええ、確かに…。彼自身が、心から”心器”を望んでいないから…”心器”が呼びかけに感じないのかもしれない」

「どうするのだ、エンフェル殿!? 流石にこのままでは…」

流石のリエルも焦った様子を見せる。

「…用心は、しておくべきかもしれません」

エンフェルの言葉は周囲を緊張した雰囲気させるのには十分だった…。

俺はそれを難なく後ろに跳んで回避。

「かかったな…！」

大降りの攻撃を外して無防備な化け物。この時を、待っていた…！

ビュン！

俺は短剣2本を揃えて目の前に投げつける。
化け物は攻撃に備えて身を屈めた。

ストン！

短剣は化け物には当たらず、そのまま向かいの壁に突き刺さる。
化け物は俺が攻撃を外したと思っっているのか、こちらに攻撃しようと身構える。

「…バーカ。死ぬのはテメーだよ…！」

俺は腕輪のスイッチを押し、ワイヤーの巻取りを開始した。

…と同時に、今まで緩く巡らされていたために、地面に垂れていただけのワイヤーが巻取りによってピンと張り詰め、周囲に浮かび上がってきた。

その光景に、化け物は警戒したように周囲を見渡す。

…そう、今の短剣は決して化け物を狙ったものではない。

短剣じゃあ倒せない。ならば、今俺が奴に決定打を与えられる方法は限られてくる。

…やがて、地面を垂れていたワイヤーの一つ　俺のちょうど前にあるワイヤーが、一斉に張り詰めた。

ビュウン！

『ガ…グア！？』

かったぞコノヤロー！」

「…！」

まさか名指しされるとは思ってなかったのだろう。エンフェルは気まずそうな顔をする。

そんなエンフェルにも…ここにいる奴ら全員にも向けて、俺は叫んでみた。

「何が”化け物”だよ。影の異形だかなんだか知らねーがな、この程度だったらさっさと片付けて帰るからな！？　アリエル！　山ほど金用意して待つとけよ！！」

ビシ！　と指を突きつけ、ニヤリと笑って見せる。

一同、沈黙…。の後に、

ワアアアアアーーーーー！！

「あれが新しい”代表者”様…。心器も使わずに魔物を軽々と…！」

「黒い帽子と黒い外套コート…それにあの強さは…」

「心器が使えない代表者…本当にあの男が…？」

巻き起こる歓声。なぜかウケが良かったのか、はたまた俺の発言の物珍しさか…まあいい。

今日は慣れない事をやって疲れた、早く帰らせてくれ…。

俺は一仕事終えた感覚と共に、大きくため息を吐いたのだった…。

「…クソ！ 失敗か！」

闘技場の観客席。特に上流階級が座る特別式の中で、あの小太りの男が忌々しげに広場の黒い男を睨んでいた。

「完全に誤算でしたね…まさか心器を使わずに高位の魔物を倒してしまうとは…」

隣に座っている男も感心したように呟く。

「感心している場合ではないぞ…！ これからどうするのだ!？」
あくまで冷静な男に、苛ついたように男が詰め寄る。

「…今しばらくは様子を見ましょう。何、時間は十分にありますよ。
”彼”にも、十分に働いてもらわないといけませんね…」

男はそう呟くと、ただじっと広場にいる黒い男を見据えていたのだ
った…。

第8話 「心解の試練」 (後書き)

追加用語

【心解の儀】

カテゴリー：魔術

主な登場作品：Samon Hearts

概要

とある国の導師が生み出した秘術。
対象の精神世界に”心の力”を付与させる”器”を生成する。
誰にでも可能と言っわけではなく、何者にも揺らがない不屈の精神
と強い意志のある人間にのみ効果がある。

【心解の試練】

カテゴリー：文化

主な登場作品：Samon Hearts

概要

とある国で行われていた”試練”。
これに挑戦する人間は”心解の儀”によって生み出された”心器”
を用い、現れる魔物を倒す事でその存在や強さを証明する。
魔物は低級だが、”心器”を使いこなせず、敗北するようなものに
は容赦なく”死”が訪れる可能性もあることから、残酷な一面も持
ち合わせていると言える。

受験関係はひと段落。

中間テストも乗り切って、ようやく少し落ち着いてきました。次回からはペースアップを目指して頑張りたいと思います。

第9話 「内情調査」(前書き)

”心解の試練”から3日。

俺はこの国の文化を知り、この世界を知っていく。

そしてついに下された初任務。…の前に、

俺はさっそくとある人物と衝突する事となったのだった…。

第9話 「内情調査」

「シン様。お茶をお持ち致しました」

「ん、サンキュ」

リーゼが危なっかしい手つきで紅茶を置く。

つい先日聞いたのだが、リーゼは料理

いや、家事の類が全く

駄目らしい。

駄目 というのは少し語弊があるか。一応メイドだから家

事の類は一通り出来る…らしいが、そのドジさが全てを台無しにしているのだとか。

…確かに、自分の城で迷ってたしなあ…。

周囲から”落ちこぼれ”と呼ばれているコイツが俺の専属になったのは…やっぱ何らかの意図があるんだろうなあ。

「…まあ。家事は俺がほとんど出来るから、別にいいんだけどさ」
それを聞いたときのリーゼの泣きそうな顔は、当分忘れる事は無いだろうが。

「…ん、うまい」

”紅茶だけは自信がある”。…そう言ったリーゼを信じて任せてみたのだが、手つきこそ危なっかしいものの、かなりうまい。

「本当ですかっ!?!」

「おう。流石にこれは適わねえわ」

茶葉の味を見事に引き出している辺り、やはり”落ちこぼれ”とはいえ、王宮勤めのメイドというのは伊達ではないという事らしい。

「よかったあ…私、これしか取り柄が無くて…いつも失敗ばかりなんですよ」

…それは、言われなくても想像できる。

「私、メイド長のような人になりたいと思っています」

「…メイド長。まだ見たことないな…」

メイド長といえば、やはり年配の婆さんを想像するんだが…。

「すごい綺麗な人なんですよ？ シン様より少し年上位かと」
へえ…じゃあ20代かね？
ちなみに俺は今年で21歳 ”らしい”。

「ところでシン様、1つお聞きしてもよろしいでしょうか？」
「ん？」

紅茶を飲み終え、再び本のページに眼を落とす俺に、リーゼが話しかけてきた。

「その…シン様、一昨日から体勢が全く変わっていないんですが、ちゃんとお休みになられていますか…？」
不安そうな声色で問うリーゼ。

「…」
俺はじつとリーゼを見つめる。交差する視線。しばらくの沈黙。

「いや？」

「シン様!？」

「この程度の徹夜、どうということはないっての」

『シン殿。貴公は本当に面白い男だな』
『褒めてるんなら光栄だな』

”心解の試練”の後、何かと話題性の合った俺の件についての処理で、アリエルはかなり忙しそうだった。

『“心器”は発動せず、予定とは違う魔物が現れ そんな状況でも難なく勝ってしまった貴公…。予想外の事ばかりで混乱してるのは私とて同じだと言うのに…』

正直、あの化け物が予定とは違ってたつてのが一番の驚きだったんだが。良く勝てたな、俺。

『“心器”は確かに生成されています。シン様が未だそれを扱えない…ということなのでしょう』

心器が使えないことをエンフェルに話したら、返ってきたのはそんな言葉だった。

つまり…結局いつも通りにやれってことか。

心器はまさに”切り札”なだけあって、アリエルも他の代表者たちも不安そうだったが、こちらとしてはいつも通り仕事をこなすだけなので

『やれるだけやってみるわ』

の一言で黙らせておいた。

別に何てことはない。俺は今までだって特別なモノに頼ってきた事はないのだから、本当に”いつも通り”なだけである。

そんなやり取りがあつたのが一昨日の出来事。

それから指示があるまで自由にしていいたことだったので、俺はそのまま城下へ。

目的はまず、この世界の事について知る事と、この国の”内情調査”だった。

通貨はいくらか渡されたものがあつたが、これでは全然足りそうにないので、俺はまず”資金を用意する事”から始めた。

…まあ、特に何かをしたってわけじゃない。単に持ち歩いている宝石を売っただけだ。

俺は仕事の報酬を一部宝石にしている。…それは何も隠すだけじゃない。

宝石なら小さく、持ち歩きやすい。自宅の金が盗まれていても、こうして持ち歩いておけばいくらかは確保できる。

そして、”今回のような時”に一番の利点を発揮する。

宝石の価値は万国共通。それはこの世界でも同じ、貴重なものだ。

だが、仮に俺が”あっち”での札束を持っていようが、この世界ではただの紙切れでしかない。

通貨から通貨へ換えるわけにもいかない。この世界ではそもそも向こうの通過が何の役にも立たないのだ。

だからこそ俺はこうして”宝石”を持ち歩いている。

これなら金が必要なとき売ってしまえばいい。売る場所がなくとも宝石ならば大抵は貴重品として十分価値が通る。

この世界においてもそれは例外ではないらしく、大き目の宝石を2つ売ったら白銀貨が10枚手に入った。

通貨に関しての説明は既に聞いている。

単位が”ミル”で…紙幣流通がない。

貨幣は銅、銀、金、白銀貨の4種類で、銅貨だけ大きさを価値が変わる。

1ミルが銅貨1枚。100で銀貨一枚。1000で金貨一枚。そして10000で白銀貨1枚だそうだ。

つまり、今の手持ちは10万ミルということになる。

リンゴが1つ5ミルだったから…リンゴ2万個か。…イマイチピンとこない。

まあとにかく、資金面では問題無くなったので、城下の見物と本屋、図書館で何冊か本を入手してこの日は城に戻った。

…で、それを一昨日から今の今まで一睡もせずに読んでいたというわけだ。

「うう…確かに平気そうには見えませんが…」

「…昔、ある組織のトップを暗殺しろって仕事があつてな」

尚も不安そうなりげに、ちよつとした昔話をしてやる。

標的は山奥の廃屋である取引を行う予定だったらしく、狙うならそこだと思い、俺は狙撃銃片手に、その組織が取引を行う”3日前”から狙撃ポイントの草陰に潜んでジツとしていた。

…そうすることで、完全に”自然の一部”に溶け込んだわけだ。

無論、飲まず食わず、一睡もせずで微動だにもせず待ち続けている。当然だ、当日にこの辺りに来ていても、恐らくは見張りの連中だらけで狙撃どころではなかっただろう。

まさか連中も、3日前からこの場所に潜伏しているとは思っても無かったので、近くの見張りだけ始末して悠々と標的を狙撃。そのままあつという間に逃げおおせる事に成功したのだった。

…3日ぶりの食料と水は、おいしかったなあ…。

「す、すごいです…」

「…つまり、だ。何が言いたいかと言うとだな」

俺は、壮絶な日常に驚いているリーゼにひとつ間を置いて言った。

「俺にとってはこの程度の徹夜、余裕だって事だ。心配するな」

「わ、わかりました…でも、ほどほどにしておいてくださいね…？」

流石に言っても無駄だと判断したのか、リーゼは渋々ながらも頷いた。

……。

……。

……。

「ふう…こんなもんか」

リーゼに言われる頃には読み終えかけていたので、ひと段落までにはさほど時間はかからなかった。

「お疲れ様です」

リーゼは紅茶をテーブルの上に置いた。

「ところで、何を調べていたんですか？」

「ん、とりあえず大体この世界の事についてわかったかな」

この世界の暦は神暦。

現在は神暦1900年で、1年は365日。…この辺は同じ。

時間の概念も同じ、24時間で一日が終わる。四季もあるし、そういった基本的なことは向こうと何一つ変わらない。

現在は”初夏の月”…確か4月だそうだ。

この大陸、”ローザニア大陸”は、現在確認されている中でも西に位置する大陸で、ローザニア王国が大陸全体を統治している。

首都がこの”ランブルグ”…つまり、あの姫さんがこの大陸の最高権力者ということだ。

森林地帯が多く、気候も穏やかで、生物が住むのに適した土地だと言える。

驚いたのは、この世界にも機械文明が存在している事だ。

…と言っても、まだまだ日常生活に浸透するほどのものでもないらしいが。

このローザニア大陸は、そういった部分にも力を入れており、人界でも特に発展している大陸の一つと言われているらしい。

”影の異形”はこの大陸の北東部の城を占拠し、恐らく現在そこが本拠点となっている。

ここランブルグは大陸の西端に存在しており、まだまだ侵攻には余裕があるとか。

…まあ、早く殲滅できるのならそれに越した事は無いのだが。

その他諸々、種族に関してだとか、食文化に関しても大体頭に入っ

た。
基本は向こうと変わってない、というのが一番ありがたい。この世界の文字も、よく見るとアルファベットに形が告示しており、そのまま英語の読みで問題なかった。

どうやら異世界とはいえ、ことと向こうは細かいところがいくつかリンクしているようである。

「すごいですね…異界から来たとは思えないくらいです…」

この覚えの速さは、リーゼも感心しているようだ。

「まあ…基本”向こう”と同じだしな」

アフリカのある部族に潜り込むときだって、こうやっているいろんな文化を学んだんだっけか。

…ホント、色々やってんなあ、俺…。

「…で、リーゼ。一つ聞きたい事がある」

「はい？ 何でしょうか」

しばらくして、俺はリーゼに問いかけた。

「…この国、どうなってるやがる？」

「え…？」

俺の質問の意味がわからなかったのか、リーゼは首を傾げる。

「あの、どういう意味でしょう？」

「城下もそうだが、この城も相当内輪揉めがひどいだろう？」

別にこの3日間延々本ばかり読んでいたわけではない。

街の構造とか、この城の事とかを調べていたりもした。

こそで一番気になっていたのが、この国の内情についてだ。

「王女” 大臣” 貴族” 騎士団” 神殿” 使用人” …色ん

なやつらが派閥になって水面下で潰し合いをしている。それぞれ色

んな思惑があつてな…違うか？」

「あ…やっぱり、わかります？」

リーゼは申し訳なさそうな表情を浮かべる。

この城どころか、”この街全体”がかなり内輪揉めでゴタゴタしている。

そついう内部事情を詳しく把握するには情報屋等を駆使したが、

そもそもそついった雰囲気敏感なため、違和感はあからさまに感じられた。

「…姫様は、結婚する気が無いそうです。御両親 先代の王様

と、王妃様が亡くなられて、そろそろ後継者の事も考えなければいけないのに…」

王族つてのは面倒だとつくづく思う。

好きでもない相手との政略結婚やら、権力目当ての下種どもの悪意やら、そついった色々な思惑の板ばさみに合うわけだ。

あの姫さんも相当気苦労が絶えないだろうなあ…。

「結婚する気が無いってのはなんとも珍しいな。」国の事を最優先に”つて堅実なタイプの統治者だと思つたんだが」

「国のための思つから…ですよ」

俺の言葉に、リーゼは悲しそうに眼を伏せる。

「姫様はわかっているんです、この国が今現在水面下で不安定になっ
ている事を…。姫様がなぜ結婚なさらないのかは判りませんが…
少なくとも、今のこの不安定な状態のままではそのような事を考え
ている余裕が無い…とは思っています」

後継者云々の話が出てくれば、権力目当ての連中がまた利を得よう
と群がってくる…か。

どうやら姫さんは俺が思っている以上に堅実な統治者だったらしい。

「姫様は、この国と結婚する…とも仰っていました。…あるいは、
本気でそれを貫き通されるおつもりなのかも…」

国と結婚…か。

最後まで国のために生き続ける…何ともスケールのでかい話だ。

「…で？ お前さんはあの王女の派閥なのか？」

「私は中立ですよ…こんなピリピリした空気には…正直耐えられそ
うにもありませんから…」

…現在確認したのは、王女を中心とした”王女派”。

これは王女がそのまま目的になっていると言っている。

この国のゴタゴタも、”影の異形”も何とかする…一番正統派で、
マトモと言えるだろう。

次に、大臣…主に宰相が中心となっている”大臣派”。

正直こいつ等もわかりやすい。

こいつ等は女性が王である事を快く思っておらず、隙あらば足元を
掠めて権力を握ろうとしている連中である。

次に、王宮に仕える貴族が中心の”貴族派”。

目的は大臣派と同じ、権力や地位だろうな。

ただ、こいつ等は大臣派と違って王宮の人間に近づき、媚を売って
入り込もうとする連中が多いのが特徴だ。

次に、王宮、宮廷、神殿仕えの騎士が中心の”騎士派”。

彼らは王女派と同じで”影の異形”とこの国のゴタゴタを何とかするのが目的らしい。

一つ違うところは、墮落しきった王族や権力者に頼らず勝利する事で、自分たちの存在価値を証明しようとしているところだ。

次に、神殿の導師　　つまりエンフェルが中心となっている”神殿派”。

エンフェルがそういうつもりで動いているわけではなく、基本的にエンフェルの取り巻きが独自に動いているらしい。

目的や行動はエンフェルの意思によって変わるため、行動が予測できないのが難点だ。

そして、メイド長が中心に王宮仕えの使用人が集まった”使用人派”。

権力者の内部事情に詳しい彼等は、その情報操作によって権力を貪ろうとする連中を牽制しているようだ。

彼等はあくまで”使用人”。地位や権力には興味が無いらしい。

…他にも城には何か勢力があるみたいだが、それはまだ把握しきれないのていまは割合する。

城下にも派閥がある。

まず、街の人間が集まり、この内輪揉めでゴタゴタしている国を革新しようとしている”革命派”。

最も大きな勢力で、行動も過激。権力による力では王宮の連中が圧倒的に有利だが、決して無視できる存在ではない。

それと、街にある商人ギルドが中心となっている”商人派”。

彼らは国の行く末や内乱などには興味が無く、ただそういつた事によつて自らが利を得られればいいようである。

…利、というのは権力などではなく、あくまで”金”に限つた事だそうだ。

「…とりあえず、こんなところか？」

「…シン様つて、本当にすごいですね」

あつという間にこの国の内情を見抜いた俺に、リーゼはとても驚いているようだ。

…まあ、問題はこの国の派閥の数ではなくてだな…。

「今現在、俺のことを各派閥がどう思っているのか、それが重要だわな」

姫さんが認めている以上、王女派の連中は俺に協力的だろう。

古いしきたりに拘る貴族や、突然現れた異端イレギュラーを快く思っていないのは、大臣派と貴族派。

他に頼ろうとしていない騎士派も同じだな。

神殿と使用人は…まだ様子見だとして、城下の革命派、商人派も俺の行動次第…と言つた所だろうか。

大臣や貴族に媚を売つても利は少なそうだから、現時点では無視しとくとして…いくつかの派閥とはコンタクトを取つてはおきたいところではある。

ただでさえ俺はこの国　この世界の事についてはわからないことだらけなのだ。ある程度信用できる人物は、多いに越した事はない。

「まあ、こういつた事は追々何とかしていくとして…俺はいつまでのんびりしてりゃいいんだらうな？」

先日の”心解の試練”について不可解な事だらけだったこともあり、その処理で姫さんも忙しいのは分かるが、いつまでものんびりさせてはくれないだろうが…。

コンコン…

「失礼致します」

「あん？」

ノックの音と共に、1人の兵士が部屋に入ってくる。

「シン様。姫様がお呼びです、至急謁見の間に御越し下さい」
噂をすれば…ってか？

「あいよ　じゃありーぜ、行って来るわ」

リーゼは「いつてらっしゃいませ」と頭を下げて見送る。

俺はそんなリーゼにヒラヒラと手を振ると、兵士に連れられて謁見の間へと向かったのだった…。

……。

……。

……。

「来たか、シン殿」

謁見の間には、既に他の代表者が集まっていた。

…と言っても全員ではない。

確か…アゼルと…ユミル、だったか？

「先日の”心解の試練”の後処理に手間取ってしまったが、そろそろ貴公達に動いてもらわなければならない」

あー…やっぱりそういうことだったのね。

「今回の任務はここランブルグの南西に位置する森林地帯。そこに巢食う魔物の殲滅だ」

…ん？　魔物？

「はい、質問」

俺は拳手して言う。

「うむ、何だ、シン殿？」

「俺達は”影の異形”相手の切り札じゃないのか？　それが魔物相

手に3人も必要つてのは…何かあったのか？」

俺の問いに、アリエルは深く頷く。

「うむ。…この森林地帯は魔物をはじめ、多くの動植物が生息する地帯であり、近隣の村や町が頻繁に魔物の被害を受けていたのだ」

まあ…魔物がいる森林の近くに集落があるならそれも仕方ねえわな。

「それらはそれぞれの自警団や、このランブルグから派遣した騎士団によって倒せていたのだが…つい先日の報告によると、魔物の数が多く、凶暴化しているということだ」

…なるほど、そういうことか。

「確か”影の異形”の影響で魔物が凶暴化、活性化したって報告も過去にあつたらしいな」

「うむ」

3日徹夜で頭に叩き込んだ知識は無駄ではなかったらしい。

「つまり、オレ達が魔物を食い止めつつ、”影の異形”がいたら叩き潰せばいい訳か」

「そういうことだ」

アゼルの言葉に、アリエルは頷く。

「ねえ、コイツって心器が使えないんでしょ？ 大丈夫なの？」

ユミルは俺を指差して告げる。

「確かに”影の異形”相手に戦えるかは分からんが…魔物が相手ならばシン殿は間違いなく戦力になる。それは貴公も十分理解しているだろう？」

おそらく、”心解の試練”のことを言ってるんだろう。

「まあ…確かに」

あれ以降、コイツも俺の實力に関しては認めてくれているらしく、アリエルの言葉に渋々ながらも頷いていた。

「ところで、他の連中はどうしたんだ？」

前聞いたローウェルとか言う奴は、相変わらず玉座の裏に気配を感じるところだろう。

…と、なると残りの3人はどうしたんだ…？

「彼らには別の任務で先に出発してもらっている。セレーナはまだ合流できそうにないな」

「セレーナ？」

初めて聞く名前だな…？

「神族の代表だよ、まだ顔合わせは当分先になりそうだな？」

アゼルの言葉で納得した。

名前からして…女か？

「出発は明日の明朝とする。各自準備を整えておくように」
アリエルのその言葉で、今回は解散となったのであった…。

……。

……。

…。

「準備つつつても特になんないんだよなあ」

「え、シン様、何も持ってないのでは？」

自室に戻った俺はそのままベッドに横になる。

そんな俺の様子を見て、リーゼは心配そうな表情を浮かべる。

「持つてるさ、ホラ」

そう言つて、俺はコートの裾を捲つてやる。

太股には短剣がそれぞれ身に着けてある。

ベルトには、皮製の小さなケースがいくつか取り付けてあった。

ここには”仕事柄”必要なものを入れてある。この前売った宝石も

この中に入れてあった。

召喚されるときも身に着けてあったので、これらは失くすことなくしっかりと持つてくる事が出来ていたのである。

腕にはワイヤーをはじめ、色々と便利な腕輪も身に着けたままなので、これら”常備品”が全て揃っているのなら、最早何も準備する必要はないのである。

「荷物が多いと行動しにくくなる。基本的に俺は残りは現地調達す

る主義なんでね」
非常用の保存食と小さな水筒ならあるので、それは後で用意するが、それ以外は現地で用意する。
サバイバル技術は既に習得済みだった。
「んじゃあまあ…長持ちしそうな保存食でも探してくるわ」
自分で作るにしても食材を買ってこないといけないため、俺は立ち上がると、リーゼに手を振りながら部屋を後にするのだった…。

「あら、シン様」

「…っ」

「お？」

廊下で再びエンフェルとレフィリナの2人と出くわす。

…相変わらずレフィリナの様子がおかしいよなあ…。

「お出かけですか？」

俺の向かう方向から外へ行くと思ったのだろう。エンフェルが聞いてくる。

「ん…まあな」

「明日、出発なんですってね。いかがです？ 緊張してますか？」

「まさか。俺はいつも通り”仕事”をこなすだけだったの」

向こうも俺の返答は予想していたらしく、エンフェルはクスクスと笑う。

「頼もしいですね。…ですが、心器が出せない状態で”影の異形”を相手にするのは危険すぎると思います。くれぐれも慎重にお願いしますね？」

急に真剣な声色でエンフェルは言うが、正直”影の異形”とまだ対峙した事がないので、イマイチ実感が沸かない。

「…ま、何とかなるだろ。死にそうになったら逃げりゃあいい」
「…っ！」

ズイッ！

「…お？」

その発言を聞いて、最近ずっと静かだったレフィリナが俺に詰め寄る。

「…すつげえ睨まれてるんだけど？」

「…」

「…何だよ？」

相手は所詮少女だ。睨まれたって別に怖くはない…が、なかなかの迫力がある。

「レフィリナ、何を」

「あなた…っ！ エンフェル様にその言葉遣い…今まで我慢していましたが。せつかくエンフェル様が心配してくださっているのに、その言い方はないんじゃないんですかっ！？」

エンフェルが何か言いかけて、それを遮る様にレフィリナが叫ぶ。

初対面の時から想像もつかない剣幕だ。

「最初に会ったときもそうでした。貴方は”影の異形”の恐ろしさに関しても、”代表者”に選ばれたことに関しても、自覚が足りないです！ もっとしつかりしたらどうなんですか！？」

「…おいおいおい」

このガキ、言わせておけば…。

「テメーにどうこう言われる筋合いはねーっての。最初に言っただろうが。俺は”代表者”じゃねえ。ただの”便利屋”だっつーの」「それがどうかしているというんです！ だから”心器”も出せないんじゃないんですか！？」

「別にんなモンに頼るつもりもねーよ。最初ツから俺は俺のやり方で何とかするつもりなんだからよ」

手段は選ぶつもりはない。俺はさっさとやる事やって帰りたいんだ。そのための近道が非合法でも、俺は一向に構わない。

「貴方…っ！ この世界の希望であるという自覚が…！」

「ホントーに言葉の通じないガキだな…」

「ガキですって!？」

「あの、お2人と、そこまでに
すごい剣幕で噛み付いてくるレフィリナと、それを面倒そうにかわ
す俺。」

そしてそんな俺達を必死に止めようとするエンフェル。

…あー。本当に面倒になってきた。

「もういい。オメーみたいな”お嬢ちゃん”には一生わかんねえ考
え方だっつもの。…じゃあな」

あくまで俺を”代表者”扱いするコイツに何を言っても無駄だろう。
そう判断した俺は、ヒラヒラと手を振りながらさっさと脇をすり抜
けて歩いていった。

「ちよつと! 未だ話は」

後ろでまだ何か叫んでいるようだが、聞こえないフリをして、俺は
城下へと向かったのだ。…。

第9話 「内情調査」(後書き)

〈追加用語〉

【異界^{いかい}】

カテゴリー：世界

主な登場作品：全般

〈概要〉

機械と科学が発展した現代世界。

3世界でからは切り離され、観測されていない”異世界”である。

3世界でも科学と機械文明が生まれ、それと同時に”異界”の存在も概念的に存在されるようになった。

”異界から人間を召喚する”といった魔術が生み出され始めたのもその頃からである。

【異界人^{いかいじん}】

カテゴリー：種族

主な登場作品：全般

〈概要〉

”異界”に住まう人々　つまり現代人のことである。

白人、黄色人、黒人といった様々な人種があるが、”異界”に住まう人々は全て”異界人”。または”異人”と呼ばれる。

科学と機械の文明で繁栄している為、当然ながら魔術の適正は限りなく低く、全く扱えない者もいる。

しかしながら、3世界とは全く違う”機械技術”は、時に魔術を凌

駕する可能性を秘めている。

【機械技術】きかいぎじゆつ

カテゴリー：文化

主な登場作品：全般

〈概要〉

主に”異界”で発達している技術・文化だが、3世界にも神暦1800年頃から機械技術が生まれ始めた。元々魔術万能世界である3世界にとって、”機械”という技術は受け入れがたい”異端”であり、その技術の進歩は微々たる物だが、”物”が時に魔術と同等の力を発揮する”機械”と言う存在に、多くの人々の注目が集められている。

【神暦】しんれき

カテゴリー：文化

主な登場作品：全般

〈概要〉

3世界の暦である。1年365日で1ヶ月が約30日と、基本的には”異界”と変わらない。3世界の暦である。1年365日で1ヶ月が約30日と、基本的には”異界”と変わらない。

それと同時に時間の概念も同じで、四季も存在する。唯一違うのが月の名称で、1月が”初春しゆしゆんの月”。2月が”常春じやうしゆんの月”。と言ったように、季節の時期で呼んでいる。

【通貨】^{しゅうか}

カテゴリー：文化

主な登場作品：全般

〈概要〉

”異界”を除く3世界の通貨は”ミル”である。

紙幣流通はなく、銅、銀、金、白銀貨の貨幣通貨であり、銅貨のみ大きさを価値が変わる。

1ミルが小銅貨、10ミルが大銅貨で、100ミルで銀。

1000ミルで金。10000ミルが白銀貨である。

ちなみにミルは日本円で約10分の1の価値となる。

(例) 1ミル=10円

【ローザニア大陸】^{たいりく}

カテゴリー：地名

主な登場作品：Samon Hearts

〈概要〉

”人界”の西端に位置する大陸。

大陸全体を”ローザニア王国”が統治しており、温暖な気候と森林地帯の多さから、”人間の住みやすい土地”として有名である。

大陸全土を1国が統一してあるため、戦乱が少なく、優秀な統治者のおかげで国民は平和で穏やかな暮らしが来ている。

その住みやすい環境から多くの種族が暮らししており、総人口も多い。神暦1890年頃から機械技術の発展にも力を入れ始め、”人界”

の中でも”発展大陸”の一つとして数えられる。

最近、他の方の小説を読みながら、文章の書き方を変えてみようかなと考えております。

今の書き方だと読みにくいでしょうか…？

そういった感想も頂けると嬉しいです。

第10話 「初仕事」 (前書き)

何はともあれ、俺を含めた3人は目的地へ向けて出発する。
影の異形はこの世界にとつての”脅威”。その存在に、俺も自然と
身を引き締める。

…が、その前に行くわしたトラブル。

…俺の”初仕事”は、もう少し先になるらしい。

第10話 「初仕事」

「この乾パンうめえ」

俺はもしかやもじゃと袋詰め乾パンを食いながら呟いた。

レフィリナに変な言いがかりをつけられた後、俺は城下のとあるパン屋にてこの乾パンを発見した。

保存食の基本と言えば”乾燥”だ。

…一つ欠点があるとすれば、保存食は長持ちする分、大して美味くないという点。

しかし、この乾パンはなかなか美味い。もちろん普通の食事と比べると劣るが、”保存食”という分類ならば十分だろう。

乾パンにしてはそこまで硬くなく、仄かな甘さが飽きない。

…うん。これは向こうよりずっと美味しいと思う。

これが売っていたパン屋はそこそこ繁盛していたのだが、この乾パンは袋詰め山ほど売れ残っていた。

「こんなに美味しいんだから、もっと売れてるかとも思うんだがなあ

…」

…まあ、パン屋に来て乾パン買って帰る物好きはあまりいないのかもしれない。

そのおかげで、俺はこうして買いためが出来たのだから良しとしよう。

値段も安かったし、いい買い物をした。

……。

……。

「シン様、準備はもうよろしいので？」
部屋でくつろぐ俺を見て、リーゼが訊ねてくる。

「食料も水も準備したし。もう大丈夫だな。後は明日に備えるだけだ」

俺はそう言つと、手をヒラヒラとさせる。

「緊張は…してないですよ…？」

「ん…まあな」

いつもと同じ調子の俺に対して、リーゼはどこか不安そうだ。

…俺より不安そうにされてもなあ。

俺は俯くりーゼの頭にポン、と手を乗せてやる。

「俺は身体張るのは慣れてるんだよ。心配すんなって
そう言つて、笑みを浮かべる。

それを見たりーゼは一瞬目を輝かせたが、すぐにまた不安そうに
俯く。

「…どうした？」

「シン様は…私が初めてお仕えた方ですので…何かあったらと思
うと…」

「…初めて、って…」

今までずっと王宮勤めだったってか？

…やっぱり俺、落ちこぼれを押し付けられたな。とは、口が裂けても言えなかった。

実際、全く不安じゃない。と言えば嘘になるのだ。

何せ明日はこっちでの”初仕事”。今までの常識が一切通じない以上、何が起こるか予想も出来ない。

だからこそ、俺は俺以上に不安になってくれているコイツの存在が少し嬉しくもあつたりする。

「…ま、ちゃんと生きて帰ってくるから、部屋の掃除とかは任せたぞ？」

俺はそう言つて再び笑顔を浮かべる。

…さつさと仕事を済ませて、こいつを安心させてやらないとな…。

そんなことを、俺は考えていたのだった…。

……。
……。
……。

「お、おはようさん！」

「おう。随分早いな？」

てつきり俺が一番かと思っていたのに、早朝の中庭
角の野外訓練場には、既にアゼルの姿があつた。 その一

「当然だ！ 毎日こつして早朝に身体を動かす。これがオレの日課だからな！」

「なんともまあ、熱心な…。」

ドスッ！！

手に持っているのは…槍か？ それを練習用のカカシに勢い良く突き刺すアゼル。

第一印象から想像していたが、やっぱりコイツは熱血タイプらしい。

「オレは日課だが…オマエも訓練か？」

「いんや。俺はいつも通り起きただけだよ」

「早起きなんだな！」

ブウン！

そう言いながら槍を振り回すアゼル。

…動きに無駄がない。かなりの実力者だ。

毎日早朝訓練をやっていると聞いたが、そういった訓練と、実戦での経験。その両方のバランスが取れている。

まさに典型的な”戦士”なのだろう。

「緊張してるのか？」

「まさか」

向こうは俺に気を遣っているのかもしれないが、リーゼにも言ったように俺は全く緊張なんてしていない。

「仕事柄、戦場には慣れてるからな。いちいち緊張なんてしねえよ」

…何度も死に掛けたら肝も据わる。

ブウンー！！

「そうか！ …… せっかくだから、訓練に付き合ってくれねえかな？
2人の方が捗ると思うんだ」

「ん…まあ、身体を動かすのもいいかもな」

特に断る理由もなかったので同意する。

それを聞いたアゼルは笑顔を浮かべると

「よし！ じゃあ早速始めようぜ！」

そう言って、広場の方へと歩いていった…。

……。

……。

……。

「ホントに何も持たなくていいの？」

訓練場の一角にある広場。そこで、槍を構えるアゼルと、素手で
身構える俺が対峙していた。

「いつも通りで戦うなら、俺はこれが一番相応しいからな」
武器は現地調達。それはこの世界でも変わらない。

それに俺には太股の短剣と、腕輪のワイヤーがある。
それを使うならば、まったく素手というわけでもない。

俺の答えに納得したのか、アゼルは一つ息を吐くと、姿勢を低く
身構えて

「そっか…。じゃあ、いくぞー！」

叫び、突っ込んできた。

ブオン！！

「ッ……！」

さつき見たときに感じていたが、速い。

一瞬で距離を詰め、突き出された槍を身体を捻ってかわす。

そのまま一旦後ろに跳んで距離をとろうとする、と

「逃がすか！」

ブウン！！

「なっ……！？」

突きの動作から身体を捻り、槍が薙ぎ払われる。

槍のリーチならば、この距離でも届く……！！

そう判断した俺は、後ろに倒れこんでそれを避ける。

「っ……！」

ヒュン！！

そのままの勢いで俺は脚を上げ、がら空きの顎を蹴り上げようとした。

「くっ……！」

……が、それは首を後ろに逸らされて避けられる。

俺は蹴りの勢いを維持したまま数度後転。ある程度距離が取れた

後、即座に身構える。

「やっぱやるなあ。今の薙ぎ払いは手応えがあったんだが」
残念そうだが、アゼルはどこか嬉しそうに言った。

「悪いね、こっちも場数が違うんだよ」

…とは言え、コイツはかなりの強敵だ。

槍の弱点は接近戦である。

何せ槍の刃は先端にしか付いていないのだ。それを回避して懐に入ってしまうかどうかどうしようもなくなってしまう。

…問題は、この男には懐に入る隙が少ないという事。

槍の弱点が接近戦だと言う事をしっかりと理解して、立ち回りや攻めも基本に忠実と言える。

基本に忠実だからこそ、付け入る隙が少ない。

…全く持って、侮れない。

(…仕方ない、俺も俺なりの戦い方でやらせてもらうか)
俺は一息吐くと、太股の短剣に手を掛ける。

「…」

向こうもその動きに気付き、警戒している。

…基本に忠実な奴を崩す方法は…

「シッ…!」

「ヒュー…!」

俺は短剣とワイヤーを連結させ、アゼルに投げつける。

「と……！」

ガキイン！

真正面からだ、突然とはいえ、難なく防御される。

「……！」

ヒュッ！ ヒュッ！

短剣が弾かれる前に俺は駆け出し、足元に転がる石を2、3投げつける。

「なっ……っ……！」

カン！ カン！

それは流石に予想外だったのだろう。アゼルは若干うつろたえながらも槍で石を弾く。

「ッ……！」

ヒュッ！ ビュン……！！

それを確認した俺は、大きく周りを回るように走り、石と混ぜて回収した短剣を再び投げつける。

「しまっ……くっ……！！！」

意表を突かれてばかりのアゼルだったが、しっかりと短剣に反応して弾いてくる。

「…(ニヤ)」

「!? …え …!?」

…パキン。 ボフ!!

突然不適に笑った俺に動揺したアゼル。 …が、直後にそれとは違う意味で動揺する事になった。

アゼルが短剣と一緒に弾いた”何か”。

それが弾かれた衝撃で割れ、中から白い粉が周囲に煙のように立ち込めたのだ。

「ゲホツ…ゲホツ…なんだ…コレ…!?」

いきなり立ち込めた煙に咳き込むアゼル。

…別に煙は有毒とかではないぞ?。

俺はその隙に短剣を回収し、アゼルに向かって駆け出す。

「ッ…!? させるか…!」

ビュン!!

「くっ…!」

流石にこの程度で無力化できるわけもなく、アゼルはこちらの気配を察して的確に槍を突き出してくる。

…だが、その突きはどこか曖昧で、確実にこちらを狙えているも

のでもなかった。

俺は左右に大きく揺れながらそれをかわし、槍を突き出したアゼルの右腕を掴む、

「…掴まえた！」

「なっ」

煙で視界も悪く、突然のことに動揺して隙が生まれる。

その一瞬が、命取りになる。

ガッ！

「痛っ…！」

俺は短剣の柄で右手首を殴りつける。

隙だらけのアゼルはそれだけで槍を持つ手を緩めてしまう。

俺はその隙に槍を掴み、手を捻ってアゼルから槍を奪い取った。

「ちょ」

ドン！

武器を奪われ、さらに動揺するアゼルの足を払い、突き飛ばす。

バランスを崩し、後方に倒れこんだアゼルの喉元に、俺はやりの切っ先を突きつけていた。

「…勝負あり」

「あ…？」

あまりにも突然だったので、アゼルは未だポカンと口を開けていた。

「あ…あ…。そっか。…そうだな」

ハハハ…と、力なく笑うアゼルを見て、俺は手を差し伸べてやる。

「流石に強いな。万全じゃなかったら勝てなかった」

「お互い様だろ。…闘技場で見たときに、”そういう戦い方”をすすってわかってたんだがなあ…」

アゼルは頭を掻きながら、俺の手に掴まって立ち上がる。

「この粉、なんだったんだ？」

アゼルは周囲に散らばっている白い粉を見ながら問う。

「小麦粉だよ。今日パン屋でついでに買った」

「…あー。なるほど」

…貴重だったんだが、ついつい本気を出して使ってしまった。

先ほど俺が石に混ぜて投げたのは、薄いガラス製の玉。

これは俺が向こうで使っていた物だ。

中に粉状のものを詰めて、煙玉として使用する。今日、ベルトのケースに入っていたいくつかに小麦粉を詰めておいたのだった。

…こつちじゃ玉の補充が出来ないから、かなりの貴重品である。

「一本とられたなあ。オレもまだまだって事か」

そう言っつて爽やかに笑うアゼル。

…勝負は勝負。こつちで勝ち負けに関係なく嫌味のない奴は嫌いじゃない。

「今回は油断したが、今度は負けないからな！」

そう言っつて手を差し出す。

その意味を理解した俺は、逆の手を差し出して

「ああ、次も手加減なしだ」
固い握手を交わしたのだった…。

…
…。
…。

「全員揃ったようだな」
やがて集合の時間となり、俺達は王宮の門前に集まっていた。

「王女自らが見送りとは、またご大層だな」
エンフェルとレフィリナまでいるし…。

「…」
「チツ…」

レフィリナの奴は相変わらずめっちゃこっち睨んでるし！

「シン様の初陣ですからね。応援しておりますわ」
「初陣ってお前…物騒だなあ」

…まあ確かに、危険なものには変わりないか。

「…じゃ、行つて来るぜ」
「ちやつちやと終わらせてくるから。期待して待つてなさい！」
俺達3人を乗せた馬車はゆっくりと動き出し、3人に見送られて、俺達はランブルグを出発した

…。
…。
…。

この世界には電車も車も存在しない。
なので陸の主な移動手段は馬車となる。

…中には訓練させた魔物等に引かせる車もあるらしいが、それらは貴重で、少なくともこの大陸では数が少ないらしい。

一応王宮にはそういう車も用意されているらしいが、今回は目的地が近い事もあって、馬車での移動となった。

「馬車で2日か…長旅だな…」

地図で目的地の場所を確認していたが、向こうなら1日もかからないような距離だ。

魔術という存在に軽くながらも触れてきたが、こういう点においては苦労するあたり、やっぱり魔術文明も機械文明もどっちもどっちなんだと思う。

「長旅って…アンタ。異界ってのはそんなにヤワな世界なワケ？」
俺の呟きに反応するユミル。

「…航行中の船の船底に張り付いていたり。野生の猛獣の群れと丸腰で戦ったり。断崖絶壁を何も持たずに登ったり。…それはもうヤワな生活やってたよ」

ニヤリと笑いながら言ってる。

…無論、ちょっとした嫌味返しなワケだが、それを聞いたユミルは「アンタ…よく今まで生きてこられたわね…」
と、本気で心配していた。

…うん。言ってる自分でもそう思うよ。まったくね。

……。
……。
……。

「シン。ちょっといいか？」
馬車に揺られて数時間……といったところ。アゼルが話しかけてきた。

「なんだ？」

「オマエならもう予習済みかもしれないが……影の異形について話しておこうと思って」

……ああ。なるほど。

アゼルの言うように、“影の異形”についてはある程度予習済みだが、実際に何度か戦った事があるであろう人間に話を聞いておくのは悪くないだろう。

「出来るだけ詳しく頼む。これに関しては俺もどうなるか予想できないからな」

……。
……。
……。

「まず、影の異形ってのは文字通り”影”なんだ。影属性のManaで身体全体が構成されてる」

俺が頼むと、アゼルは一息吐いて話し始めた。

「普通の武器は普段の状態だとすり抜けてしまう。つまり物理攻撃

は全く効かないわけだな」

「マナを使ったもの…魔術を直接ぶつけなければいいんだよな？」

これについては知っている。

実体を持たないが故に、影の異形は魔術が扱えない人間にとっては脅威でしかないだろうな。

俺の言葉にアゼルは頷く。

「ただ。影属性は”反属性”を持たない9番目の属性。今のところ有効な属性魔術が存在しない」

”反属性”というのは、確か守護神と破壊神が創った3対

そして、双神が持つ聖魔の属性の関係の事だ。

火と氷。水と雷。風と地。…そして聖と魔。

対になっている属性はお互いに有効なんだよな。

…で、影の異形が持つ影属性は、その対となる属性がない…と。

「有効じゃない属性でも倒せるけど…半端だと逆に吸収されて、その属性の耐性も付くわ。さらに、吸収したマナを影属性に変化させて強くなる…」

「つまり、影の異形相手には短期決戦の方がいいんだ。それも、最初から全力全開でな」

…半端に挑むと、返って相手をパワーアップさせちまうってことか…。

「物理攻撃はどうしても効かないのか？」

これに関しては俺は知らない。

影の異形については情報が少なすぎる。

何せ遭遇した人間がほとんど殺されているのだ。影の異形の起こす現象に関しても、それに巻き込まれて死んだんじゃ元も子もない。

「方法は…ない事もない」

「マジか」

物理攻撃なら吸収は出来ない。俺は魔術が使えない以上、それしか対抗する手段がないのだ。

俺は思わずアゼルに詰め寄る。

「マナを吸収するとき、影の異形はその瞬間だけ実体化するの。その時は武器が効くわ」

思わず後退するアゼルに代わって、ユミルが説明する。

「影の異形には核となる部分がある。そこを砕くのが一番だな」
核…心臓のようなものか。

影の異形にも急所がある。

…魔術が使えない以上、実体化は誰かに頼むしかないが、これならまだやりようがあるな。

「…あーあと一つ。魔力を纏わせる”魔具”^{まぐ}なら、武器でも攻撃できるな」

”魔具”というのは確か、魔力の伝導率が高い武器、道具の事だ。普通の武器等も魔力を纏わせる事が出来るが、それは微弱で時間がかかるらしい。

…たしか、この大陸じゃあまだまだ貴重なものだったっけか。

「一つ疑問に思ったんだが。心器って魔具の一種なのか？」
「いや、これはどちらかというところ”魔器”に近いわね」

”魔器”というのは”魔具”と違って、個人の持つ魔力とは別に
マナを吸収、貯蔵して使用できる物の事だ。

魔具と違って本人が魔術の心得がなくても使えるため、日常生活
等にもこの技術が応用されているらしい。

判りやすく例えるなら、”電気を自分で充電しなきゃいけない道
具”が魔具で、”自動で電気を発電して使えるようになる道具”が
魔器：なのかな？

「心器はその上位である”宝具”の類らしいけどな」

”宝具”は確か…人間が作れる最高位の武具の事だったか。
高い魔力に性能…それはまさに人間の”宝”だとか何とか。

その上に神々が作れるとされる”神具”ってのがあらしいが…
それはもう伝説上の存在だとか。

「…ていうか、エンフェルって実はすごい奴だったんだな…」

「そりゃあすごいよ。オマエを召喚したあの魔術も、魔方陣も、エ
ンフェルが作ったんだから」

…”宝具”を創れる魔術や、異世界から人間を召喚する魔術。
どうやら俺が思っていた以上にエンフェルはすごい人物だったら
しい。

「…話が逸れたが、とりあえずシンは影の異形相手に戦えそうにな
いなら下がってくれていいからな？」

… 心器が使えない俺に気を遣ったのだろうか、それは愚問だな。

「バカ言うなつての。ちゃんと役に立ってやるさ。給料泥棒だなんて言われたくないんでね」

請けた仕事は完璧にこなす。それが俺のモットーだ。

……。

……。

……。

そして2日後。俺達を乗せた馬車は特に何事もなく目的地に到着しようとしていた。

「もうじきか… 退屈だったなあ…」

俺はそう言っただきく伸びをする。

馬車旅ってのは思っていた以上に退屈だ…。

オオ…
ン

「… あん？」

「どうした？」

もうすぐ到着と言う頃、俺の反応に2人が視線をこちらに向ける。

「…」

俺はそれには答えず、聴覚に意識を集中させる。

アア…
!

「… 村の方が騒がしい」

「え？」

俺の発言に、2人は不思議そうな声を上げた。
それも仕方ないだろう。なぜなら

「空耳じゃないの？　すぐ近くって言っても、村までもう少しあるわよ？」

そう。目的地はまだ少し先なのだ。

普通ならこの距離で騒がしさが聞こえるはずがない。

「…確かなのか？」

「ああ」

俺が肯定しようとしたそのとき…

ドオオオオ…　　オオン！

「「「！？」」「」」

何かが崩れるような大きな音。

今度はそれが、ここからでもはっきりと聞こえた。

「私、ちよつと見てくるね！」

村まであと少し。ユミルは馬車から飛び出して空高く飛んでいった。

「急いでくれ！！」

何も出来ない俺達は、馬車を急がせる他なかった…。

…。
…。
…。

「村の方から煙が上がってる！　影の異形じゃないけど…盗賊にで

も襲われてるのかも！」

村の周辺。このまま突入するのは危険と判断した俺達は、そこで馬車を止めていた。

「盗賊か…。影の異形じゃないだけマシ…なのかな？」

「だが、どうするよ？ このままじゃ村人が危ないぜ？」

ユミルから聞いた話によると、人数はおよそ20人前後。それなりの規模だが、どうということもない。

村人は黙って略奪に従っているので人質は今のところ無し。

…よし、やれる。

「2人は正面から突入して注目を集めてくれるか。村の中央で合流しよう」

「アンタはどうするのよ？」

「俺は2人が囷になってる間に裏手から侵入する。多分リーダーはそこだろうからな」

単純で簡単な作戦だが、これが一番確実だろう。隠密行動なら慣れてる俺が一番適任だろうしな。

「ちよつと。オイシイ所全部持っていくつもり！？」

俺の提案に、ユミルがそんな事を言う。

…んな事言ってる場合か…？

俺がそう言おうとすると

「よせよユミル。今はそんな事言ってる場合じゃないだろ？ そう
いう作戦ならシンが適任だと思っぜ？」

そう言って、アゼルがユミルを制した。

…アゼルは今朝の訓練で俺の戦い方を良く知っている。
それでそう判断してくれたんだろうな…。

「う…」

アゼルに制されて、ユミルは大人しくなった。

…流石にコイツも状況くらいはわかってくれているらしい。

「…じゃあ、2人とも。頼んだぞ」

俺はそう言っつて、林の中へと歩き出す。

「おう！ 任せときな！」

「…しくじるんじゃないわよ！」

…2人の返事に、俺は手だけを上げて答えたのだった…。

第10話 「初仕事」 (後書き)

↳ 追加用語

【神具】

カテゴリー：武器・道具

主な登場作品：全般

↳ 概要

”宝具”の上位に位置する神々の武器。
神帝、魔帝クラスの力を持つ者が想像できるとされており、”神々の戦乱”に用いられた武器は全て”神具”であったと言われている。
現在の技術での想像は不可能とされており、現存する物は伝説上の存在となっている。

【宝具】

カテゴリー：武器・道具

主な登場作品：全般

↳ 概要

人間が想像できる最上位の魔具、または魔器。
非常に高い魔術伝道率。そして武器そのものとしても洗練されており、当然ながら想像には相応の素材と技術が要求される。
その想像の困難さから貴重品である事は言うまでも無いが、同時にその性能を最大限に生かせる担い手も少なく、宝具の所有者は世界でも数えるほどしかないと言われている。

【魔器^{まぐ}】

カテゴリー：武具・道具

主な登場作品：全般

〈概要〉

魔力 マナを集め、魔術現象を発生させる道具。

魔具とは違い、持ち主がその瞬間に魔力を流し込む必要はなく、自動的に周囲のマナを吸収するものや、自身でマナを生み出し、補充するものがある。

魔術が扱えない者でも使用が容易であり、この技術は日用品等にも応用されている。

【魔具^{まぐ}】

カテゴリー：武具・道具

主な登場作品：全般

〈概要〉

魔力 マナを持ち主が流し込む事によって魔術現象を引き起こす物。

または魔術の伝導率が極めて高い物のこと。

一般的な武・道具は魔力の伝導率が低く、その効率が悪い。

それに対して魔具は、ほぼ一瞬で魔力を循環させる事が出来、中には魔術現象を発生させる事が出来るものもある。

当然ながら作製には特殊な素材が必要であり、素材、完成品共に貴重なものである。

表と裏に続いてこちらでも書き方を変えてみました。

…読みやすい…とは思うのですが、なかなか今までと違うので意識するのが大変だったりしてます。

書き方についての感想を頂けたら嬉しいです。

第11話 「始まりの村」(前書き)

村での騒動。それを難なく退けた俺達は歓迎とお礼の宴会に参加していた。

”影の異形”の存在は明日調べる事となり、俺達は明日に備えて英気を養うのだった…。

第11話 「始まりの村」

「ふむ。小さな村にしては防衛施設が充実してるんだな」

アゼル達と別れて、俺は村の周りをぐるりと迂回していた。

この村は規模こそ小さいが、木造の防壁や物見やぐらといった“防衛施設”が十分に建造されている。

…それだけ発展している。と言うよりは、“頻繁に襲われるから建造した”という意味合いの方が強そうだが…。

それを裏付けるように、村の周囲には大勢の人間がこの地を踏み荒らした痕跡が残っている。

ワアアアアア！！

防壁の向こう側から聞こえてくる悲鳴。

…だが、その後に聞こえてきた音は、明らかに今までとは違ったものだった。

『バンフレッシュャー”爆炎の鉄槌”！！』

ドガアアアアアアアアアア！！

「…あれは」

響き渡ったのはユミルの声。…その後、ものすごい爆音と共に村の入り口の方が爆発した。

アアアアアアアアアア！！

直後に聞こえてきた叫び声は、村人とは違う、暑苦しい男たちの声。

…うん。どうやらユミルたちは派手にやってくれているようだ。

「…そんなじゃ。俺も行くとしますかね…！」

ヒュン！

俺は周囲の手ごろな木の枝にアタリをつけると、腕輪のワイヤーをベルトの金具に通し、木の枝に投げつける。

ワイヤーは木の枝に巻きつき、先端の金具で固定される。

俺はそのままワイヤーの巻取りを開始し、枝の上によじ登る。

…よし。案の定、この辺りはかなり手薄になっている。

俺の任務は簡単。

道中見つからずに敵の頭を殺す。ただそれだけだ。

万一見つかった場合は報告されないように口封じもしなくてはならない。

…何、いつもやってる事だ、問題ない。

「…と、行くか」

あまりモタモタしているとアゼル達が先に到着してしまう。

俺は思考を中断すると、枝の上から防壁を飛び越え、村の中に侵入した。

……。

……。

…。

「オイ。何事だ!？」

「入り口で暴れてる2人組みがいるらしいぞ!」

「いや、”3人”だ」

「?!？」

ズシャアツ!!

「カ…ヒ…」

残っている見張りの内、避けて通れそうにない奴を始末しながら進む。

どうやら村人は一箇所に集められているらしい。

頭がいるとしたら…そこかな。

俺は今殺した2人の盗賊の死体を草むらに隠すと、気配を殺して村の中心部を目指すことにした…。

A n o t h e r S i d e

「うおおおおお!!」

ブウン!!

周囲には数人の盗賊。オレはそれを槍を薙ぎ払って吹き飛ばす。

「くそ…なんて馬鹿力なんだ…！」
「力だけが取り柄だからな…！」

ドン…！

オレは目の前の盗賊目掛けて槍を突き出す。
盗賊は慌てて防ごうとするが、そんなハンパな防御じゃ防ぎきれない。

「ぐあっ…？」

盗賊は突きを防いだにも関わらず、その勢いで大きく後方に吹っ飛ばされた。

「…のっ…！」

その後、オレの背後から別の盗賊が剣を振りかぶり襲い掛かってくる。

「死

ウィンドアロー

”風の矢”…！」

ビュオウ…！

「がああ…？」

…が、盗賊は突如飛んで来た風の矢に貫かれ、その剣を振り下ろすことなく息絶えた。

「前ばっか見てんじゃないわよ。しっかりしなさい！」

「悪い悪い！ 助かったぜ！！」

オレは風の矢を放ったユミルに礼を言うと、槍を振り回して盗賊どもを威嚇する。

そして、その勢いに若干気圧される盗賊どもに槍を突きつけ、叫ぶ。

「さあ、死にたい奴はかかって来い！ オレが相手だ！！」

「アタシも忘れないでよね！」

シン…頼むぜ…！

Another Side Out

「アアン！？ たった2人に何やってんだテムエらは！！」

ドガツ！

「ガツ…す、すいませんお頭ア！！」

村の中心部には、大勢の村人が集められていた。

入り口でのアゼル達の様子を報告していた1人の盗賊。コイツの発言どおりなら、その前にいる男がこの盗賊どもの頭なのだろう。

さて、このまま殺ろうにも見張りが多すぎる。

…ちなみに今、俺は近くの家の屋根の上にいる。

「何とか隙を作らないとなあ…」

”奇襲”というものは基本的に一度しか通用しない。

つまり、失敗は許されない…のだが、少なくとも今の状況で成功するとは思えない。

…あの頭だけ殺ればOKなんだがなあ…。

「仕方ない。アゼル達の到着を待つか」

2人がここまで来れば、連中の注意はそっちに集中するはずだ。なんとかそこで隙を見出せば…。

「…と、噂をすれば…。…意外に早かったな」

そんな事を考えていると、意外にも早くアゼル達がここまでやってきた。

オイオイ早いなあ…流石は”代表者”ってわけか。

「ちよつと…！？ シンはど　　むぐっ！？」

危うく俺の存在を口走りそうになったユミルの口を、アゼルは慌てて塞ぐ。

それで、自分が危うい事をしようとしていた事を理解したのか、ユミルは押し黙った。

…ふと、こちらを見上げたアゼルと目が合った。

まさか…最初から俺の位置がわかってたのか…？

もしそうだと言うのなら…やはり侮れない男だ。

「テムエらか！？ 俺達の邪魔をした2人組みつてのは！！」

盗賊の頭は、自分たちの邪魔をした2人を睨みつける。

「そつだ！ 村を開放しろ！！」

「うるせえんだよ！！ てめーらこそ、邪魔すんじゃねえ！！」

盗賊の頭は、突然現れた邪魔者に相当苛立っているようだった。

「邪魔つて何よ！ 邪魔なのはアンタだつーの！ さつさとこの村から出て行きなさい！！」

「！！！！」

頭の言葉を聞いたユミルは、ビシッと指を突きつけ、叫ぶ。

…あのバカ…苛立ってる相手を挑発したら面倒な事に…。

「上等だテムエ！！！！」

「え きやつ！？」

…案の定、頭は近くにいた村娘の手を掴み、引き寄せて、喉元に剣の刃を当てた。

何てこつた…これじゃあ奇襲どころじゃない。

「動くなよ…？ 動いたらこの女の命はねえぞ！！」

「あゝあゝもう…」

盗賊どもはじりじりとアゼル達に近寄っていく。

人質を取られている以上、アゼル達は手出しが出来ない…。
…やるとしたら、今しかないか…。

「じゃあねえ。行くか…！」

ビュンツ！！

俺は頭の方へ短剣を投げつける。

…だが、それは頭を狙ったものではない。

この位置では人質を盾にされる可能性もあつたからだ。

スバツ！！

「…え？」

「なっ…！！？」

短剣は”村娘の方”へと飛んで行き、その長いスカート裾を軽く切り裂いた。

そして…頭の視線はその一瞬”人質の方”へと向く。

「よし…！」

俺はすかさず屋根から飛び降り、頭の方へ走りながらワイヤーを巻き取って短剣を回収。

そのまま人質の方へ向いている頭の視界から外れるようにぐるりと周囲を回りながら、もう片方の腕輪のワイヤーを投げつける。

ビュウン！！

「な…え…」

突然の事で驚いている頭は、未だ状況についてこれていない。

…やはりゴツい身体なだけあって、頭は足りないらしい。

俺の投げたワイヤーは剣を持つ頭の腕に絡みつき、金具で固定される。

それを確認して、俺はワイヤーを巻き取る。

ギューイイイイイイ！！

「な…がああああ！？」

勢い良くこちら側に引き寄せられ、頭は人質を手放してしまう。

「今だ！ アゼル！」

「おうよ！…！」

人質がいなくなれば何も問題はない。アゼルは槍を構え、ユミルは魔術の詠唱を始める。

「ずいぶんなことしてくれたわね…覚悟しなさい！！」

ユミルの叫び声を聞いて、向こうは大丈夫そうだと判断した。

俺はワイヤーによって引き寄せられてくる頭の腕を短剣の柄で殴りつけ、剣を落とさせる。

そして…

「よっと…！」

ブーン…！

「なあああああ…！」

ズシヤアアアア！！

その腕を掴み、背負い投げ。

即座に地面に倒れる頭をつつ伏せに返し、頭と両腕を抑えて拘束する。

「く…くそっ…！ テメエ…何者だ…！？」

ようやく状況が飲み込めてきた頭は、自身を上から拘束する俺に向かつて問いかける。

…何者かって？ そりゃあお前…

「…ただの便利屋だよ」

…俺の答えは、一つしかなかった。

「ぎゃあああああ！！」

叫び声に後ろを振り返ると、ちょうどアゼル達も周囲の盗賊たちを倒し終えたところだった。

「ふう…。助かったぜ。シンがいなかったらどうなっていた事か…」

「気にすんな。お疲れさん」

俺達はハイタッチをする。

…と、後は…

ペチン！

「痛い！？ 何よいきなり！！」

俺はユミルの額に指を弾いてやる。

「何だじゃねえよ。俺の位置をバラそうとしかけたり、無意味に相手を挑発して面倒にしてくれやがって。もう少し考えて行動しろ」
「う、ぐ…」

てつきり何か言い返してくるかとも思ったが、どうやら自分の失態はきちんと認めているらしく、俯いて反省していた。

…ふむ。割とその辺はしっかりしているらしい。

「まあまあ。何とかなっただんだからいいじゃねえか」

アゼルもこう言っていることだし。俺も同感だからこれ以上ユミルを叱るのはやめておくことにした。

「ま…次は気をつけるよ？」

「わ…わかってるわよ…」

……。

……。

……。

「本当に、ありがとうございました…！」

先ほど人質となっていた村娘は、ぺこりとお辞儀をした。

彼女はどうかやらこの村の村長の娘らしい。

俺達は村の危機を救った恩人と言う事で、今は村長の家で歓迎とお礼の宴会をやっている。

盗賊連中はとりあえず縄で拘束して、後日やって来る城の兵士たち
ちに引き渡すそうだと。

「まさか代表者様たちだったとは。本当になんとお礼を申し上げて
いいか…！」

「いやいや、礼ならオレ達よりもそのシンに言ってやってくださ
い」

アゼルは俺に話を振る。

「黒衣に黒い帽子の代表者様は今まで存じ上げておりませんでした
が…貴方も？」

「いや、俺はただの便利屋だよ」

あくまで”代表者”は否定する。

「ふむ…？ お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「ん…シンと名乗ってるよ」

俺はその問いに答えて、再び料理を口に運ぶ。

小さな村とは言うものの、並んでいる料理はどれも素朴ながらも
美味しい。

王宮で食べていたものは高級感があって、美味しいのは美味し
いが、どうにも肌に合わない感じがしていた。

そういったものよりも、やはり俺はこういう素朴でありふれたも
の方が好みなんだと思う。

「シン様。お酒もありますよ」

村長の娘は、黙々と料理を食べる俺に気を遣っているのか、酒瓶を持ってやって来る。

「ああ…すまん。酒は飲まないんだ。代わりに水を持ってきてくれないかな」

職業柄、アルコールは口にしないことにしている。

” 仕事中だけ飲まない” とか、そんな風に決めていたわけでもなかったが…特に自分から飲むこともなかったから、そのまま普段も飲まなくなっていた。

「どうぞ」

村長の娘は水をコップに注いでくれる。

「悪いな。…ところでお前、名前は？」

「え…？ あ…レルといます」

レル…そう名乗った娘は、再び軽く頭を下げる。

「皆さんは村の恩人ですから、たくさん食べてくださいね」

「おう！ やっぱ運動後のメシは最高だな！」

「アンタ、本当に元気ねえ…」

…もうじき夜になる。

いきなりとんだハプニングだったが、長旅で疲れていたのもあって、俺達はこの周辺の調査は明日行うことにした。

…まあ、…うづいうのも悪くない。

……。
……。
……。

夜になった。

俺達は村の宿屋に部屋を借り、今日はそこで寝る事になっている。

…が、俺は生憎と、こういう”初めて来た場所”では安眠できない体質なため、こうして宿屋1階の酒場で時間を潰していた。

カラン…。

「ん…？」

不意に扉の開く音が聞こえる。

酒場の中は既に暗く、中の様子は開かれた扉から差し込む月明かりを頼りにしなければわからない。

…気配を感じる。俺は眼を凝らしてそっちの方を見る、と、それは良く知った人物だった。

「レル？」

「…」

俺が声をかけると、レルはゆらりとこちらを振り向く。

その目はどこか遠くを見ているようで、意識がはっきりしているのかどうか怪しい。

「…おい」

「…え？ あ…！！ え…！？」

俺が再び声をかけると、レルは急に意識を取り戻したかのように反応した。

「あれ…？ えっと…シン様？」

「おう。…どうした？」

「え…いえ。ちょっと眠れなくて…」

俺の問いに、慌てたようにレルは言う。

「シン様も眠れないんですか？」

「ん…まあな」

…俺の場合、”眠れない”なんてレベルの話じゃないのだが…。

「…そういや、お前さんに一つ聞いておきたい事があったんだけどさ」

「はい？ …なんででしょう？」

レルは自然と、俺の座っているテーブルの向かいに座って聞く。

「ここ最近…魔物とか、そういう類に襲われた事って…あるか？」

「魔物に…ですか？」

俺の問いに、レルはきょとんとする。…まあ、俺の質問の意図なんてわからないのだろうが。

「村はよく盗賊や魔物に襲われますけど…」

「いや、そうじゃない。”お前が”…だ」

レルの返答を遮って、俺は言い直す。

「それか… 1人で魔物が出そうなところに行った事があるか…な」
「えっと… 確かに最近、森に薬草を摘みに行きましたけど、特に襲われた覚えは…」
「ん… そっか」

レルの返答を聞くと、俺は立ち上がり、階段の方へと歩き出す。

「もう夜も遅い。俺も寝るから、お前もさっさと帰りな」
「え…。 あ、はい…。 そうですね…」

… 明日の方針は、決まったな。
俺は1人納得すると、自室へと戻った。

… こうして、初めての村での夜は更けていくのだった…

第11話 「始まりの村」(後書き)

↳ 追加用語

ウィンドアロー

【風の矢】

カテゴリ：魔術

主な登場作品：全般

↳ 概要

小さな風の矢を生み出し、対象に放つ風属性下級魔術。精度が高く、素人でも比較的容易に使える魔術であり、熟練者は一度に数発の発射が可能。

バインブレッシャー

【炎の鉄槌】

カテゴリ：魔術

主な登場作品：全般

↳ 概要

巨大な炎の塊を生み出し、対象の頭上から叩き落す火属性中級魔術。炎の塊は落下後爆発し、広範囲に影響を及ぼす。威力、範囲共に強力な魔術ではあるが、制度が悪く、魔力の消費が激しいのが欠点。

更新ペースが落ちてる…。

なんとか日曜に間に合うように頑張りたいです。

第12話 「影の異形」 (前書き)

翌日になって、俺達は本腰を入れて周辺の調査を行うこととなった。

原因はやはり影の異形で間違いない…。

そんな確信とともに現れた”親玉”と、それ故に確信へと変わった悲しい事実が、俺達の前に立ちはだかったのだ…。

第12話 「影の異形」

「…確かに、近頃周辺の魔物が凶暴化しているようです」

翌日、俺達は村長から周辺の魔物の凶暴化について聞いていた。

村長の話によると、やはりこの周辺の魔物が活性化しているらしい。

この村は相次ぐ盗賊の襲撃から防衛設備を強化しているため、比較的被害は少ないらしいが、このまま凶暴化が続くようであれば、流石に危ないとの事。

「…やっぱり、森の奥になんかいるってコトかな？」

「その可能性が高いでしょうね…」

「…」

俺は、アゼルとユミルが相談しているのを後ろから聞いていた。

…森の奥に何かがいて、それが今回の魔物の凶暴化の原因だということとは…間違いないだろう。

だが妙だ…。なぜ魔物を使う？ 影の異形なら、自身が襲撃すれば一発でこんな村は壊滅するだろう。

…やはり、これは…。

「…よしっ！ じゃあ、今日にでも森に行ってみようか！」

アゼルは勢いよく立ち上がると、俺達にそう宣言した。

…まあ、勢いがあるのは認める。けどな、お前…。

「この辺の森は結構深いぞ？ この辺に詳しくないのに進んで、遭難したらどうするつもりだ？」

「うぐ…それは…」

勢いも重要だが、それで俺達が危ない目に合っては元も子もない。まあ…俺はサバイバル術も習得しているから、死ぬ事はないだろうが…。

「親玉がどこにいるのか位はアタリをつけとかなないと、この広い森を闇雲に探るのは効率が悪い」

「それなんです…心当たりがない事もないのです」

突然の村長の言葉に、俺達は揃って振り向く。

村長の話はこうだ。

凶暴化した魔物はいつも”同じ方角から”やってきていた。

そして、魔物がやってくる方角にはかつて獣が巣にしていた洞窟があるとのこと。

仮に、親玉がいるとするならば、その可能性が高いらしい。

「…そういや、あの盗賊どもはどっちから来たんだ？」

俺は机の上に地図を広げ、村長に見せる。

「えっと…たしか、こちら側から村を取り囲むようにやってきました」

村長は指で地図をなぞり、盗賊の進行方向を示す。

…ふむ。これは…。

「ちょっと、ど」行くのよ?」

俺は踵を返し、村長の家を後にしようとする。

「盗賊の頭のところに行つて来る、何か知っているかもしれない」

俺はユミルにそう告げると、村の牢獄へと向かった…。

……。

……。

……。

「テメエ…!」

村の牢獄。

そこには、昨日村を襲った盗賊のうち、生け捕りにした連中が収容されていた。

当然、そこには盗賊の頭も含まれている。

頭は俺の顔を見るなり、今にも襲い掛かってきそうな勢いで睨んでくる。

「よう。気分はどうだ?」

「…」

周りの盗賊も、こちらを睨んできている。

俺はそんな事は気にせず、牢屋の中に入った。

…ちなみに、彼等は牢屋の中で、さらに鎖に繋がれているため、牢屋を空けても問題は無い。

「…なんのつもりだ」

「お前らに聞きたい事がある。この辺の魔物についてだ」

こいつらは盗賊だ。

村の人間に話を聞くと、こいつらは頻繁にこの村を襲ってきた連中だと言う。

盗賊なら、街道を通って村に接近するはずがない。

つまり、”この周辺の森を通って”村に接近するはずなのだ。

そういうことなら、この周辺の森についても何か知っているかもしれない。

俺はそう思ってここにやって来たのだった。

「…ハッ！ 誰がテメーなんかに教えるかよ！！」

「…ふむ」

まあ、概ね予想していた反応だ。

俺は頭の背後に回ると、手錠で繋がれた手を持つ。

「…何だ」

「どうしても教える気はないのか？」

「二度も言わせんな！！ 人に物を頼むときはそれ相應の態度ってモンが」

バギイ！！

「あ、があああああああ！！！？？」

頭の悲鳴が牢屋に響く。

…まあ痛いだろうな。”指の関節を外されたら”。

素直に教えてくれないなら、まあこうするしかあるまい。

「お頭ア!？」

突然の頭の悲鳴に、手下の盗賊が声を上げる。

「…おっと」

「…ヒッ!？」

そいつの喉元に、短剣の切っ先を突きつける。

「そうだな…じゃあ、一本ずつお前の指の関節を外して行って、手下を1人ずつ殺していったら、教えてくれる気になってくれるか？」

「ぐ…テメエ…!!」

痛みに呻きながらも、頭はこちらを睨むのをやめない。

「言っとくが脅しじゃねえぞ？俺はあの2人より優しくねえんだ」

”代表者”ならありえない行為も、”便利屋”なら問題ない。

誰を拷問しようが、殺そうが、俺にとっては”いつも通り”だ。

俺の声色から、本気だと言う事を察した頭は、観念したように目を伏せる。

「…何が聞きてえんだ」

「…賢明で助かるよ」

俺は、1人ほくそ笑んだ。

……。
……。
……。

「なるほど。やっぱりあの辺りで問題はなさそうだな」

牢獄を後にして、俺は1人呟く。

頭の話では、”ある区域のみ”、凶暴な魔物が多いので避けてい
るらしい。

…そしてそれは、先ほど村長が言っていた”魔物が攻めてくる方
角”と一致する。

「…奥にいるのが”親玉”なら、楽なんだがな…」

呟きながら、俺は村長の家の扉を開ける。

「あ、お帰りなさい」

「…レル？」

村長宅では、なぜかレルまでもが待っていた。

「どうだった？何かわかったの？」

「ああ…。多分、”親玉”はさっき言った方角で間違いはないと思
う」

俺は若干うつろたえながらも答える。

俺の言葉を聞いたアゼルは、今度こそと立ち上がり、叫んだ。

「よっし！　じゃあ決まりだな！！」

「それはいいんだが、何でレルが？」

俺は、意気込むアゼルはそのままに問いかけた。

「先ほども言いましたが、この辺りの森は深く、地理に詳しくないと迷います。なので案内役を誰かに任せようとしたのですが…」

「

「そしたら、彼女が立候補したのよ」

ユミルの言葉とともに、レルはペコリとお辞儀をする。

「…おい、いくらなんでも危険すぎるだろ。他に誰か」

「だ、大丈夫です！　私、足手まといにはなりませんから！！」

…いや、無理だろそれは…。

「私に出来る事があるなら…お手伝いをさせてください！　危険なのは承知の上です！！」

「…いやいやいや」

相手が得体の知れない化け物だったのに、素人を連れて行く馬鹿はいねえだろ普通…。

そう思い、多少強引にでも却下しようとする…

「まあ待てよシン。オレ達もさっきそう言って止めようとしたんだって」

「はあ…？　じゃあ何で…」

「

「少し…事情がありました…」

俺の言葉を遮って、村長が口を開いた。

村長の話によると、この村は盗賊の襲撃が原因で人手が足りず、いつもギリギリの生活を送っていたそうだ。

そんな中、レルは人一倍村のために尽力し、特に薬草摘みといった”村の外”での仕事はほとんど彼女がやっていたという。

「そんなわけで、森の案内役には彼女が一番適任なのです」
「…なるほどな…」

まあ、一番詳しいのが彼女なら、適任といえば適任だが…。

…同時に、俺は、全てを理解していた。

「…わかった。けど、足手まといにはなるなよ？」

「あ…はい！ありがとうございます…！」

俺の許可を聞くと、レルは嬉しそうに笑い、再び頭を下げたのだ
った…。

…
…。
…。

「皆さん、こちらです」

準備を整えた俺達は、すぐに森の奥へと出発した。
レルの先導で進む中、今のところ魔物の姿はない。

森は、不気味なくらい静けさに包まれていた…。

『…さつきあんなに反対してたのに、随分あっさり受け入れたんだな？』

道中、アゼルが耳打ちしてくる。

『別に、危なくなったら隠れてもらえばいいと思ったただだよ』
『…そっか』

アゼルは、それ以上なにかを聞いてくることはなかった。
それからは特に会話もなく、俺達はただ黙々と森の中を進んだ。

…妙なのは、凶暴化した魔物が多く住み着いているはずなのに、一度も遭遇していない事だ。

気配も特に感じない。警戒されているのか…それとも…

「もうすぐ到着です」

やがて、それなりの大きさの洞窟が見えてきた。

周囲には木々が少なく、この周辺だけ妙に開けている。

「…」

俺は地面を軽く探ってみる。

「…どうしました？」

「…つい最近まで獣がいた形跡があるな」

獣の毛や足跡。匂い…

どれもかなりはつきりと残っている。
それだけ数が多く、まだこの辺りにいる…

「獣じゃねえな」

「ッ!？」

アゼルの呟きで、俺も気配を察する。

ガサガサガサッ!!

瞬間、周囲の木々の陰から、獣のような化け物
魔物の群れ
が飛び出してきた。

「ちよつと、これって…!？」

「畏…か。やっぱりな」

俺達はレルを囲むように三角に陣形を組むと、それぞれ正面の魔
物どもを睨む。

「けど、これは…こつちの動きが読まれてたってコトか!？」
「…」

俺はちらり、と背後にいるレルを見る。

レルは不安そうに周囲を見渡している。

「…どうする? いけるか…?」

「当然。このくらいどうってコト」

アゼルとユミルの2人が盛り上がっている中、なぜか魔物たちは
身構えたままゆっくりと後退していく。

「…どうした？」

「…親玉のご登場、ってワケか」

俺は洞窟の奥を睨みつける。

…洞窟の奥から、”何か”がゆらりと蠢き、ゆっくりとこちらに歩いてきた。

…ズシツ …ズシツ

…やがてそれは、確かな”影”となり、その姿を俺達の前に見せた。

「…これは」

…それは、まさに”異形”だった。

黒いドロドロとした体躯、その全身に走る光る線。そして、手足の先端や頭部を覆う骨のような甲殻。

そこか覗く眼は、妖しく光り、こちらを睨んでいた。

アアアアアア

アアアアア!!!

「く…」

「アタリだ…！ 出やがったな、”影の異形”…！」

影の異形は、声のような…悲鳴のような雄たけびを上げ周囲を威圧する。

なるほど…これは確かに”ヤバい”。

今まで死にかけたことは何度もあるし、こっち来てからは見たこ

ともない化け物とは何度か戦ってきたが、これは明らかに別格だ。
”ヤバい”。そう本能で感じるような相手と対峙するのは、いつ
以来だったろうか。

…だが…こいつよりも色濃く気配を発しているのは　！

「シン！ オマエは周りの魔物を頼む！ コイツは俺が…」

「いや、”そいつじゃない”」

「え…？ ちょっと、それってどういう　」

ユミルは問い返すが、俺はそれには答えず

ドス…！！

「え…？」

背後にいた”レルに”、短剣を突き刺していた。

「ちょ…アンタ、何を…！」

「いや…様子が変だ！」

レルは心臓につきたてられた短剣をぼんやりと見つめている。
…が、やがて、その身体がガクガクと震えだした。

「あ…が…アガガガアアアアアガガガ！！??？」

…やっぱり…コイツ…！！

「下がれ！」

俺の合図で、俺達はレルから距離をとる。

見ると、レルの心臓からは真っ赤な血…ではなく、黒いドロドロとした泥のような液体が流れ出ていた。

…ちょうど、そこにいる影の異形の身体を構成している液体のような…。

「どっついうことよ…これ…!?!」

あまりの出来事に、ユミルは口元を押さえながら混乱する。

「落ち着け…。最初からコイツが本体だったんだよ」

背後を見ると、先ほどの影の異形はドロドロとその身体を崩壊させていた。

…恐らく、本体を攻撃されたから、体を維持できなくなったのだろっ。

「シン…これは…」

「…城の記録に残ってた。」こういうケース”が、過去にあったっ
て」

影の異形の中には、人間に”核”…本体を植え付け、苗床として身体を乗っ取る奴がいるらしい。

魔物が待ち伏せしてたのも…恐らくコイツが連絡したんだろっ。

レルは以前、薬草摘みで魔物に襲われたと言っていた。

昨日の夜、ぼんやりと宿屋に現れたあいつは…多分、影の異形に身体を制御されていたんだろっ。

大方…俺達の寝込みを襲うつもりだったのだろっが。

「普段はレルに意識の主導権を握らせて村の中に潜伏し、俺達みたいな”ご馳走”が来るのを待っていた…ってところか」

相当知能がある奴だな。

ただ…1つ誤算だったのは、最後の最後で気配を隠しきれなかったことだ。

化けの皮をはがされたんじゃ…もっとうしようもねえわな…！

「あ…ア…アアアアアア アアアアアアアア…！！」

やがて、レルから流れ出した黒い液体は俺達の背後の崩れた影の異形を同化し、その真の姿を現した。

「シン…。前からアイツがレルに取り付いてたってコトは…レルは

…」

アゼルの問いに、俺は無言で首を横に振る。

「…そうか」

苗床になった時点で、そいつの肉体は”死”を迎えている。

城の記録ではそう書いてあった。

背後で倒れているレルを見る。

…それは、まるで抜け殻のように生気を失っていた。

「…」

胸糞悪い。

こっついうのは、気分が悪い。

ズキリとした痛みを感じて、俺は顔の左半分を抑えた。

「…こんなのっ…絶対許さないんだから…っ!!」

「…だな。ヒトを人形扱いするなんてのは、胸糞悪イわ」

目の前でその姿を現した影の異形に、2人も感情の昂ぶりを抑えられないようだった。

「そいつは頼む。魔物の相手は任せろ！」

流石に、ここで俺がやるべきことはしっかり理解している。

心器がない以上…俺は魔物の相手をしたほうがよさそうだった。

「…ああ、頼む」

「こっちは任せなさい！」

後ろの魔物は俺、前の化け物はアゼルとユミル。

…俺達は背中合わせに向き直り、目前の敵へと駆け出した…

第12話 「影の異形」 (後書き)

世間はもうすぐクリスマスですね。

すっかり肌寒い季節となりました。

もうすぐ今年も終わりますが、来年も頑張っていきたいと思っています。

よろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6210u/>

~ Samon Hearts ~

2011年12月18日03時00分発行